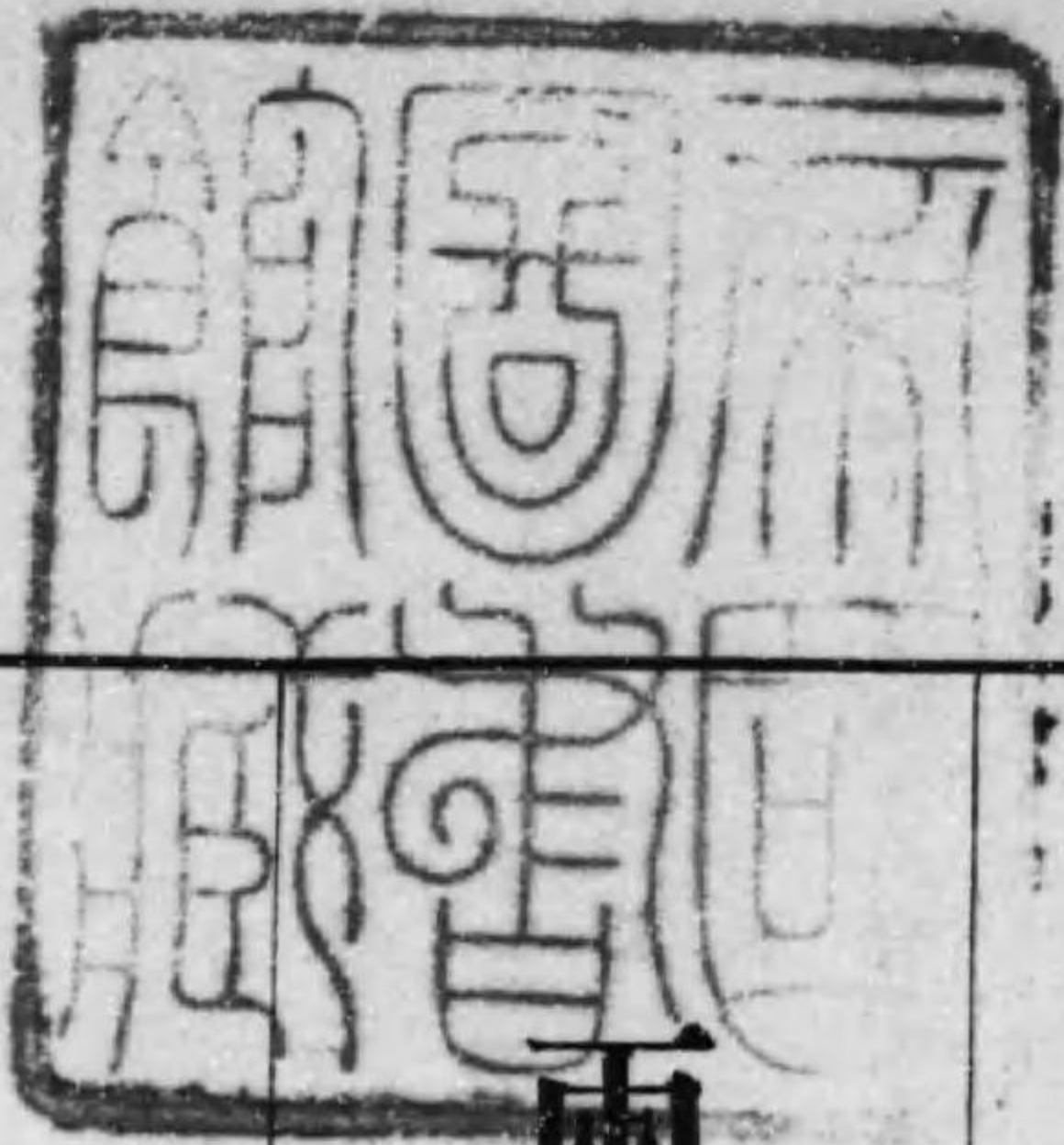


始



多祖と懐ふ

504-24



兩祖を懐ふ

曹洞宗師家 佐々木珍龍老師著

東京 一喝社發行

大正
11. 4. 20
内交



恭しく、此の書を

日域、曹洞宗

高祖 承陽大師

真前に

太祖 常濟大師

虔しみ、謹んで、撃げ奉る。

目次

上篇 承陽大師を懐ふ

- 第一節 大師の偉大性……………(一)
- 第二節 大師と國家思想……………(一〇)
- 第三節 正覺成就と空手還郷……………(一四)
- 第四節 大師と民衆思想……………(一八)
- 第五節 勤王の精神……………(二四)
- 第六節 美術方面の趣味と殖産興業……………(三二)
- 第七節 卓越せる宗義……………(三六)
- 第八節 大師の聖徳と靈應瑞化……………(四六)

第九節 大師示寂と其の遺徳……………(五六)

下篇 常濟大師を懐ふ

第一節 大師の出世及び修學……………(七七)

第二節 大事了得……………(八四)

第三節 綿密なる行持……………(八八)

第四節 總持の開闢……………(九六)

第五節 大師の遺志とその著述(上)……………(一〇一)

第六節 大師の遺志とその著述(下)……………(一一一)

第七節 十種の勅問……………(一二六)

第八節 總持寺の將來……………(一三三)

上篇 承陽大師を懐ふ

この十方は一方にいり、一佛に在る、このゆゑに現十方せり、十方一方、是方自方今方なるがゆゑに、眼瞞方なり、拳頭方なり、露柱方なり、燈籠方なり、かくのごさくの十方佛土の十方佛、いまだ大小あらず、淨穢あらず、このゆゑに十方の唯佛與佛、あひ稱揚讚歎するなり、さらにあひ誹謗してその長短好惡をとくを轉法輪とし説法とせず、諸佛および佛子として助發問訊するなり、佛祖の法を稟受するには、かくのごとく參學するなり、外道冤黨のごとく、是非毀辱することあらざるなり、いま眞丹國につたはれる佛經を披閱して、一化の始終を觀見するに、釋迦牟尼佛いまだかつて佉方の諸佛それ劣なりととかす、佉方の諸佛それ勝なりととかす、また佉方の諸佛は諸佛にあらずととかす、おほよそ一代の説教に、すべてみえざるところは、諸佛のあひ是非する佛語なり、佉方の諸佛、また釋迦牟尼佛を是非したてまつる佛語つたはれず。——【正法眼藏十方の卷】

第一節 大師の偉大性

世既に現代の如く、混亂擾争の極に達し、人格は低下し、人心は不安となり、綱紀弛廢、道德廢頽、低劣愚昧の淫祠邪教も猶ほ救済を説くに至る、之れ盲者の聾者を罵るに等しく、蛆蟲の蛆蟲を嘲けるにも似たる、寧ろ滑稽事であり、悲惨事である。

億々に曹洞宗の開祖、常陽大師の御在世當時、即ち武士道漸く頭を擡げて從來の、長袖者流と權を争ひ、將に社會改革の途に就ける鎌倉時代は、大正の今日と寔に酷似せる社會状態であつて、その時代に眞に宗教としての宗教、人間の生命としての眞劍なる信仰は起つたのである、又哲學と政治とは並び行はれ、哲學は即ち新興宗教の基根となつて教權を張り、政權に依つて右左せられたかの觀がある、茲に至つて始めて社會不安は一掃されました。鎌倉時代に新興せる宗教中の勢力ある一宗派としての禪宗に二大潮流があります、その一は臨濟宗であるし、他の一宗は曹洞宗であります素是れ佛心宗としての一大源泉であつたのであるが、分れて二流となり宋土より日本

に傳へられたのであります、臨濟宗は榮西禪師の傳へる所であつて、禪師は正法興隆正禪護國を主張せられたのであります。我が承陽大師は始め此の榮西禪師に京都の建仁寺に隨いた人であるが、間もなく榮西禪師の遷化に遭ひ、明全和尚に隨つて宋土に入つたのであります。

承陽大師の御出家は無常觀に在つて、御幼時より轉軻不遇の間に育ち、出家得道するに至るまで、正師を失ふこと一再に止まらず、高貴の出であるに關はらず、自ら宋土に入つては參師問法の爲に粉骨碎身の辛勞を惜まれなかつた、在宋五ヶ年御歸朝になつてより身を深草の閑居に託し、或ひは永平の深山に分け入つて、眞に菩提心ある人間を、眞個に佛法を我が生命とするの道士を養成せんが爲めに、一個半個の雲衲を接得せられ、精力萎へ身命疲るゝをも厭はれなかつたのであります。

大師當時の教界は、可成腐敗し墮落し、教相判釋の學問に没頭し、社稷も朝變暮改猫眼もたゞならぬ激變を見たのであります。其頃漸く民衆は永年續き渡る戰爭に倦み親子の間に血を流し、兄弟の間柄で弓矢を引くの愚に飽いて、新宗教の出現を待つた

此の人心の趨向と弱點に適當せる宗教として淨土宗と眞宗の勃興せることを數へねばなりませぬ。之等の宗教は皆人間の弱點を肯定し、生者必滅會者定離の世相を憐んで未來往生を説き、惡人正機の法を説き、易解易行を樂しむ常沒常流轉の衆生として我等の人生を悲觀的に見たのであります。然るに我が承陽大師の家風は、此の悲觀的な依賴的な他力的な哀願的な易解易行の人々の所言とは相反して、自力的な努力的な自發自展の道を説いたのであります。

承陽大師の一言一行は菩薩人としての一言一行であります、吾々は單なる弱い愚劣な人格劣等の人から如何程有難い説法を聞いても、夫は何等の價値が無いものと思ひます。其の眞理あり道理ある一言一行も自分の信ずるに足る大人格者から聞いてこそ信仰も大切であり宗教も必要なのであります。承陽大師の一言一行は、誤摩化しがなく勇敢であつて、不退轉の菩薩行であつたのであつて、此點が日本曹洞宗の開宗された所以であり、大師の偉大性として、吾等十萬の僧侶約一千萬の信徒を擁して今日にも猶ほ光りある所以であります。

承陽大師の開宗の態度によつて遺憾なく、偉大なる大人格者たりしその風貌を窺へるのであります。夫に先立つて、大師御降誕の模様と修學時代とを略記して、先天的に大師は宗教的天稟を具へ、非凡の法器であられたことを御紹介致したい。

抑承陽大師の御俗姓は源氏にて、人皇八十三代土御門天皇の御宇、正治二年庚申正月二日陽曆正月廿六日に降誕遊ばされた、人皇六十二代村上天皇九世の孫、右近衛大将東宮大傅贈従一位久我内大臣道親公の御子にて、母公は攝政關白太政大臣従一位藤原基房公の息女であります、第一通宗公(贈左大臣)、第二具通公(堀川大納言)、第三通光公(太政大臣大将)、第四在子姫承明門院土御門天皇國母)、第五定通公(通宗公養子正二位内大臣)、第六道元禪師(承陽大師)、第七親子(従二位大納言後嵯峨天皇乳母)、第八女子(後嵯峨天皇皇子宗尊親王室)の御兄弟にて實に大師は第六子であります。母君御托胎の時何物となく、只空中に聲あり。『汝が托胎の兒は五百年來、肩を齊ふする者なき大聖人なるべし、いま日本國に正法を興隆せんが爲めに降臨托胎せしものなり』

と、誠に共聲が朗かて、母公の腦裏に深く記憶せられたのであります。夫より十三ヶ月を経て降誕在しませし時は、天香馥郁として瑞氣室に満ちましたので、稍日を経まして、觀相に長けたる博士が御相を拜觀致しまして、「若君は、決して凡庸の器ではない骨相奇秀七處平滿にして、眼に重瞳あり、唯恐くは父母君が、天壽永く御保らなさらぬであらふ」と、申したと云ひます、誠に空中の御告は何物であるか、果して大法守護の善神でありませう、如何にも尊いことであります、古の俚諺にも栴檀は二葉より馨し、と申しますが、斯る御聖徳の御方を申すのでありませう、然して惜しい哉父公は建仁二年十月廿日、大師御年三歳の時に薨去在らせられ、母公は大師御年八歳の時に逝去在らせられました。大師御托胎の靈瑞より御誕生の奇瑞に至り、既に端嚴なる靈骨、秀相の御聖貌は、自ら幾千萬年の後、未來際を盡して、聖徳偉業の輝を増す所以にして、實に非凡の偉人に渡らせらるゝ次第であります。

大師は御年三歳にして、父通親公薨去在ませし故、嚴父通親公の仲兄、大納言通具公が大師を御鞠育遊ばされましたが、實に一を聞て十を知るの聰明叡知に渡らせられ

其翌年即ち建仁三年御年四歳の時、唐人季巨山の詩集なる、李嶠雜詠を御讀になり、建永元年御歳七歳にして、毛詩及春秋左氏傳を御讀遊ばされ、能く其意義に御通じになつた。此年既に周詩一篇を賦して、育父通具公に呈し、通具公を驚ろかしたと申します。夫より大師は、都ての書籍を師訓を待すして能く讀み能く解義遊ばされた。承元元年冬御母公の喪に御遇ひなされましたが、母公は臨終の際に、大師を枕邊に御招になり、

「我が亡き後は、爾必ず剃髮染衣の身となりて佛法を修行し、我等父母の冥福を資け兼て又多くの衆生を濟度し、一切の人々をして上四恩を報答せしめ玉へ」と懇切に御遺誡になつたのであります。嗚呼、今此母公の御一言、一切の人々をして上四恩を報答せしめ玉への親言が、實に痛腸より出づるの血涙であります。大師をして出家得道せしめ、我洞宗をして今日あらしめ、加之我日本帝國をして今日あらしめたる所以は、只此の一言が根本基礎であると思ふのであります。今此の御一言が、我日本帝國明治維新の大業となり、世界萬國の一等國に列せられ旭の御旗を五大

州中に輝かし、宇内に文明の花を咲かせたは、或は此の一言にありませうか、大師は此の一言を聞いて、感涙に咽び、其御遺誡を御受け遊ばされ、慥かに胸に三寸の釘を打て、遂に聖徳偉業の根基を培養せられた、之れ即ち二葉より香しき梅檀であると思ひます。既に三歳にして父公の薨去に逢ひ玉ひ、今八歳にして母公の喪に御逢ひなされたこと故、非常に世の無常を御感じ遊ばされ、其弔祭を高雄寺に御修行なされたるとき、大師龕前に跪き、香を拈じて、御拜遊ばさるれば、其香の煙が、鼻々として上りまして、其家畫の幻影が、或は生じ、或は滅する有様を御覺になつて、益々生滅無常の道理を御悟りなされ、愈々出家修道の御發心が堅固になり、實に御身は高貴の華胄に在らせられながら、御精神は専ら佛道修行に傾き、日夜佛書を繙き、翌年九歳にして、世親菩薩の作なる俱舍論と云ふ大部を御讀遊ばされ、進で博く内典外典に御精通なされたので、世間の人が、其聰明英敏なるに驚き、呼んで、神童丸、或は文珠丸と稱讚致したと云ひます。

大師は御年十三歳の時外叔の松殿攝政關白藤原帥家公と申す御方が、年齢既に四

十路でありながら、未だ繼嗣とすべき御令息がなかつたので、深く大師に望を囑し、是非共猶子となし、關白の重職を繼がせたいとの事であつた、大師は密かに之を洩聞き遊ばされて、之れは我が本懐ではない、暫時も猶豫して停まるべきでないと思召し建暦二年、大師御年十三歳の春の夜、密かに京都の邸内を忍び出て、大師生母の兄様に當らせらる、良觀法眼と云ふ方の禪室を、比叡山の麓に訪ひ、事の仔細を御告になりますると、良觀法眼は非常に驚かれ、種々に諫めて、素志を翻さんとしたが、實に大師は鐵石の如き御決心にて、更に思ひ止まり玉はず、遂に入室を御許しになつた、尋て横川の首楞嚴院の、千光房に留學せられ、翌年、即ち、建保元年、大師御年十四歳の春、四月九日、天台の座主、公胤僧正に就て得度式を行ひ、剃髮染衣の僧形となり、その翌十日には僧正より、直に菩薩戒を授けられ、出家の本懐を達した。實に大師の御悦びは如何許でありましたか、夫より、大師天資の英智を以て、天台宗の有らゆる教觀を御學びになり、又顯密の法門、權實の教義に通徹遊ばされ、十五歳の御年には、最早一切經を御閲覽になり、而して顯密二教に對する一大疑問を起された。

其疑問の要旨は、顯密二教にては本來本法性天然自性身と申して、一切の衆生が其身其儘本來の佛であると云ふ、然れば何に依てか、三世の諸佛歴代の祖師方は發心修行して菩提涅槃を證得せらるゝてあらうかと云ふ、疑であつたのであります、然るに比叡山三千房の衆僧中一人の御答へ申す者はなかつた、其時三井寺の公胤僧正の學徳高きを聞かれ、直ちに公胤僧正の室に入りて、御質問遊ばされた、然るに、公胤僧正は「爾が疑點は實に我宗堂奥の玄談であつて、誠に意味深重である、今爾の爲めに説くに困しむ、たとへ又説くとも妙理を盡すことが出来ぬ、夙かに聞けば、京洛東山建仁寺の榮西禪師が、唐に遊び、西天東土傳來の佛心印を相續せられ、盛んに門風を擧揚せらる、依て榮西禪師に質さば、忽ちに瓦解氷消するであらう」と、誨へられたのであります、故に、大師は又々建仁寺に至り、榮西禪師に質問せられたのである、榮西禪師は、建仁寺の開山であつて、支那の皇帝より、千光國師と云ふ號を贈られ、日本にて臨濟宗の初祖と御成なされたる御方である、大師の御質問に答て曰く、「三世諸佛有ることを知らず狸奴白牯却て有ることを知る」と、大師は此一言下に於て、忽ち桶底

を脱するが如くであらせられたと申します、夫より大師は只管榮西禪師に就て、深く御州究あらせられたが、遂に榮西禪師は其翌年即建保三年七月五日、世壽七十五歳にして、入寂在らせられ、其衣法は、法子明全和尚に御傳に成つたのである、時に大師は御年十六歳であらせられたが、其年の七月以後は、又明全和尚に就て、前後九ケ年、經律論の三藏、顯密禪の三宗の奥義を研究遊ばされ、而して一切藏經は、殆んど一回も御閱覽遊ばされたと云ふが、實に大師の如きは不世出の大器に在しまして、幾百千年肩を齊する者なき、天資聰明英邁に渡らせらるゝ菩薩應化の大聖であらせらると謂て敢て誣言ではありますまい。

第二節 大師と國家思想

大師の大機根を以てしても、猶ほ未だ佛々祖々直指單傳の妙道に至りては、飽足ぬ所があつた、故に大宋國に渡つて、其極致を究め盡さんとの大願を起され、又明全和尚も久學の宗師家であつたが、入宋して佛教の直諦を究めんとし、大師と共に貞應二

年二月廿三日、京都の建仁寺を御出發になり筑前の博多に赴ひ、三月の下旬に商船に乗つて、愈々博多の港を解纜遊ばされたのであります、同年四月初旬、明州の界に着き、船中に在つて、大宋の五山十刹等諸寺院の様子を御窺ひになつた、此時丁度大宋の嘉定十六年五月中旬でありましたが、船中に在て阿育王山の典座なごとも、種々なる御問答がありました、其年七月に至り、浙江省慶元府の、太白山天童景福寺に御上りになり、住持無際了派禪師に御逢ひになり、異國の僧たる大師は明全和尚と共に、天童山に留錫になつたのであります、然るに流石大宋國にて有名なる大叢林で在たけれども、僧侶戒臘の位階が亂れて居りました、我大師は遠方邊國の人であるとして新戒の位次に排列致したのであります、依て英邁に渡らせらる大師は、大に之を御責め遊ばされて曰く、釋氏は法臘に依て位次を分ち、世齡を用ひざることは、正に佛祖の洪範である、然るに中華と呼ぶ、大宋國の大禪林は、何に依てか是の如く、座位を顛倒して排列せるかと、倍々之を責められたのであります。然るに老宿の僧等は正に是前例である、曩きに日本より來れる僧侶空海(弘法)、最澄(傳教)、及榮西(千光)等

の如き、皆な此の如くである、一是れは中華の舊例であるに依て改むることは出来んと大に輕蔑をいたして居りました、大師は、實に千佛の規範、今や世俗の凡情に落るか、と、御慈悲遊ばされ、又一つは邊鄙の日本國より來れるに依て、彼等が大宋を中華と誇り、佛祖の洪範あるにも拘はらず、我日本國を輕蔑するのであると、國家上の見地よりも大に慨嘆遊ばされたのであります、假令大宋の舊例なりと雖も、是れが我が佛法の惡例なれば、是非共改めねばならぬ、殊に又後日我日本より來れる僧侶、如何に明僧高德の戒臘勝れたる人にも、新戒の位次に排列さるゝことは、實に非法なることである、今改めずんば、益々佛々祖々の洪範を亂すものであると思召し、初め理宗皇帝に上奏して此の惡例を打破せんとした、其文は

「佛西天に興りて、毘尼を以て洪範と爲す、法東域に流れて、僧臘を序じ階差を分つ前古依り繇ふ、今に至りて何を廢せん、伏て惟れば皇朝聖詰にして宸慈溥通す、靈山の囑言を忘れずして、漢廷の奉行を慕ふことを願ふ、恩を垂れて僧次を質したまはゞ、受戒の先後懲りなからん、旨を頌ちて亂階を治め玉はゞ、法歲の短長以て別

つべし、外客幸に天澤に沐し、下情野詞を悉さす」

と云ふのであります、然し乍ら朝議區々にして、勅裁が下らなかつたので再び寧宗皇帝に上奏された所が、此の寧宗皇帝は其表文を御覽遊ばされて、大師の意の在る所を是とし遂に天童山に勅して、法の如く戒臘の位次を格定せしめられたのであります。是れ實に我大師の法を重じ玉ふの御精神と、又實に國家的の御誠意にまします英斷果決であつて、此の御精神が大宋國の皇帝を動かして戒次を正し給ふに至つたのであります。今其再度の上奏文を略讀しますれば、此の如くであります。

「重て白す、佛法沙界に偏くして、戒光十方を照す、況んや經に曰く、今此三界は、皆是我有なり、其中の衆生は、皆是吾が子なりと、皆是我が有を以て言ふときは、此娑婆世界は、釋迦牟尼佛の國土なり、國既に佛國なれば、人皆佛子なり、兄弟は天倫にして混淆すべからず、伏して惟れば、佛法世法理のまゝに之従ふ、天神地祇は非理を容さず、理にして或は達せざるときは恐くは是亂邦ならん、賢者は亂邦に居らず、真人は奸慝を避く、佛家の臘次にして、若的當ならずんば、王室の憲綱は

安ぞ明晰とせんや、幸に中華の聖徳を仰ぎ、爰に倭僧の鄙懐を陳ぶ、天裁胡ぞ私あらん、謹みて乞ふ戒次を正し玉へ」

實に此の上奏文を拜讀致しますると、如何に我大師が愛法の信念に篤く、國家的の思想に富ませられたかは、明かであります。此の僧臘戒次の御格定は聽て天童山多年僧臘の弊風を矯正し、又諸方の叢林も其風を聞て、僧臘の亂れたる弊を正し、皆な争ふて佛祖の洪範に復したと申すことであります。是實に我大師の常に温厚恭謙なる風采に在りましたながら、時に臨み機に應じて、英斷果決、勇往邁進、少しも屈撓し玉はず、其眼中天童山もなく、又朝廷もなく、單に法道を重んぜられ、外國の朝廷をして猛省せしめられたるは、誠に國家的思想に富ませら、大師の、面目の躍如たるを見るのであります。

第三節 正覺成就と空手還御

我承陽大師は嘉定十六年秋七月より、浙江省慶元府の、大白山天童景德禪寺に留錫

あらせられ、すでに僧戒の位次紊亂も寧宗皇帝に表を奉り、勅裁を仰で釐正せられ、而して佛々祖々嫡々相承の嗣書をも數々拜覽あらせられ、又無際了派禪師よりも、佛法の印可證明を御受けになつたが、大師の思召には未だ不充分なる處が在りしものと見えまして、一度天童山を乞暇し、五山十刹江西湖南と有ゆる明僧高德を御訪問遊ばされたけれども、我が師範と頼むべき人もなく、舊師たる無際禪師も遷化せられたことを御聞き遊ばされ、最早、我が朝に歸へらうと思召されたが、天童山に、明全和尚の居らるゝことなれば、一先面會をせようと出發されたる途中に老堯と云ふ僧に御逢ひになつた。其僧が大師に、「只今天下の大宗師家、長翁如淨禪師が、勅請にて天童山に御住職を遊ばされてある」と告げました、斯くて大師は急で再び天童山へ御登りになつたのであります。此老堯と云ふは、羅漢の化身であつて大師を守護せられた者とのことであります。

夫より承陽大師は再び天童山に御登り遊ばされ、天童如淨禪師に面會して、三拜なされるや、如淨禪師は「佛々祖々面授の法門現成せり」と仰せられたと申します。

此時大宋寶慶元年乙酉の五月一日て御座いました、如淨禪師は侍者等に告て、「前夜悟本大師を迎ふと夢む、此子、恐くは大師の再來ならん、我宗は伊に憑て大に世に興らん」と、仰せられた、果せるかな、佛祖正傳の大法は、我承陽大師に依て、初めて我日本に傳來いたしまして、大々に宗風を宜揚遊ばされ、滿天下に充滿彌淪することなりました、此年明全和尚が年齢四十三歳でありましたが、病俄かに重くなり、五月廿七日、了然寮に在て遷化致された、其遺骨をば、大師自ら日本に御持歸りになつたのであります。

我承陽大師は斯の如き有様に、重て天童山に掛錫し、それより、日々夜々座禪辨道遊ばされつゝある折柄、或時如淨禪師、大衆が後夜の座禪に睡眠して居る有様を見ての御誠しめに「參禪は須く身心脱落なるべし、只管打睡して什麼をなすに堪へん」と在るのを、傍に在て聴取し、豁然として大悟する所あり、直に方丈に上つて焼香遊ばされた。

「淨祖問ふ、焼香の事作麼生、大師曰く身心脱落し來る、淨祖曰く身心脱落脱落身心、

大師曰く這箇は是れ暫時の技倆なり、和尚亂りに某甲を印すること勿れ、淨祖曰く脱落身心、大師茲於禮拜を遊されたのであります、傍らに福州の廣平侍者と云ふが居りまして曰く、「外國人恁麼地なることを得たり、實に細事にあらず」と、淨祖曰く此中幾か拳頭を喫し、脱落雍容し、又霹靂す」と

之れが、即ち我承陽大師の正覺を成就遊ばされたる一大事因縁の端的であります。夫より此の歳の九月十八日に、祖日侍者、宗端侍者、廣平侍者、等が室内に侍して、佛々祖々單傳の大戒を稟受遊ばされました、已に我承陽大師は、初め叡山に於て公胤僧正に菩薩戒を受け、又建仁寺に在て明全和尚に菩薩戒を御受け遊ばされたけれども、今如淨禪師より稟受遊ばされたるは、眞に佛々祖々嫡々相承の大戒でありますから、大に其趣きが異つて居ります、それより寶慶三年冬まで、天童山に悟後の修行を遊ばされ、嘉定十六年の五月より、前後五ヶ年宋土にありてあらゆる辛酸を積み、既に此の寶慶三年丁亥冬（日本の安貞元年）、我國に歸らんと思召し、如淨禪師に御暇を御告げになりますと、其夜半三更の頃入室を御許しになり、祖門屋裡の秘物、秘寶、芙蓉

同楷禪師の袈裟、寶鏡二昧、五位顯訣淨祖自讚の頂相等を御授になつた。

「汝は異域の人なるを以て之を授けて信を表す、歸國して化を布き廣く人天を利せよ。城隍聚洛に住すること莫れ、國王大臣に近くこと莫れ、只深山幽谷に居して、一個半個を接得し、吾宗をして斷滅せしむること勿れ」

とは其時の御示しであります。我承陽大師は身に一卷の經を持せず、即ち空手にして御歸朝遊ばされたのでありますが、此の承陽大師の空手中には、百千萬無量の法門は皆悉包容されてある、即ち正法眼藏涅槃妙心、實相無相の空手であります、此の空手の端的を見てとる底の漢ならば、承陽大師と相見了の人であります。

第四節 大師と民衆思想

大宋寶慶三年丁亥(安貞元年)大師御歳廿八歳の冬如淨禪師に乞暇し、大和船に御召になり、肥後の川尻に御着船、京都に入り、建仁寺に御登錫になり、先師榮西禪師の塔廟を禮拜し、兼て明全和尚の遺骨をば御携帶遊ばされたのであるから、之れを榮西

禪師の御廟の邊りに葬り、懇ろに報恩の佛事を營まれた、而して新歸朝者たる大師の風評は非常なものでありました、御縁戚なる久我家の御喜びは察するに餘りあるのであります。斯くて二三年、大師は建仁寺に留錫せられたのであるが榮西禪師遷化し、明全和尚を失へる同寺の僧規は整はず、寺法も行はれず、大師の見聞に觸るゝもの、皆慨嘆の材料ならざるはなかつた。故に遂に普勸坐禪儀一篇を著はし、西來直指單傳の大法を宣揚遊ばされ四方の道俗の參見聞法する者多く、實に法門の巨益となつたのであります、山城國宇治郡深草の里に安養院と名付くる廢寺があつた、至極閑靜なるを以て大師は此に閑居し、日夜參禪辨道の傍ら辨道話一篇を御選述になり、道俗に御示になつた、高祖述懷の一偈を打して御示になりましたのも此時であります。

生死可憐雲變一更。迷途覺路夢中行。只留一事醒猶記。深草閑居夜雨聲。とあつて、其の奥床しい詩の中には、深き悟境と、人生觀が籠つてゐて誠に高尚なる大師の人格が窺はれます。此時寛喜三年後堀河天皇の御宇であります。斯る次第でありますから、誰れ云ふとなく、大師の高風は社會に喧傳致しまして、道俗、貴賤、雲

霞の如くに集り、世人皆諱を呼ばずして、深草の佛法坊聖人と稱へたと申します、此時見真大師、其他の祖師方などが御訪問なされ、佛法の奥義を御研究に成たことあります、然し此安養院は餘り狭少であります、大法擧揚の道場に堪へませんのであります、幸ひに人皇八十六代、四條帝の天福元年癸巳弘誓院正覺禪尼、大に大師に歸敬し、宇治極樂寺の舊趾に禪宇一棟を造營して祖道の興隆に盡すべく大師を屈請しました。是れ今の觀音導利院興聖寶林禪寺であります。時に御歳は三十四歳であられた。其翌年大師御歳三十五歳の時、即ち文暦元年に將來永平の二祖となる、孤雲懷辨禪師が其の御高德を慕ふて、御弟子となり、直指單傳の正法眼藏涅槃妙心實相無相の法門を、大悟徹底面授面稟せられたのであります。此の孤雲禪師は洛陽の人で、姓は藤原氏、相國爲通公の曾孫、黃門爲實卿の孫であります、極幼少の時出家なされ長なりて、博く教相に通じられた。一日歎じて曰く「大丈夫當に言を離れ、自證すべし、安ぞ能く屑々として、海に入りて砂を數んや」と遂に大師に見えて、教外の大法に御通達遊ばされたと申します、實に此師にして此資あり、三世諸佛、歴代の祖師の

番々出興にして、誠に我宗千載の幸福であります。

天福元年より寛元元年に至る前後十一年の間、興聖寺の法筵には月卿雲客の來往斷へず、隨緣設法の大家は百餘ヶ所に及び菩薩戒を受けし弟子も二千有餘人に及びしと申します、此時鎌倉の淨土宗光明寺開山良忠上人、紀州由良の臨濟宗興國寺開山法燈國師、その他各宗の各匠碩徳の、來りて參得せられたる人も多かつたと云ひます、大師は資性高德ではありましたが、一面非常に民衆的でありました。故に顯門の士が頻繁に來る宇治を厭ひ、殊に如淨禪師の言行を思慕し、深山幽谷に眞理追求の道を修したいとの念が切てありました。寛元元年御年四十四歳の時幸ひ波多野雲州の大守、藤原の義重公の懇請に依り、七月十六日に興聖寺の都ての院事をば、義準和尚に統督せしめ、只今の越前志比谷の、山間僻地、道路未開の幽谷に錫を移されたのであります。此山を吉峰と呼びまして、山の半腹に古寺の舊趾がありました。茲に前後二ヶ年留錫になり、又此年十一月に天台宗平泉寺の近邊に、禪師峰と申す所がありました、之れに遷て御留錫になり、翌春再び、吉峰に御歸錫になつたのであります、寛元

二年、大師御年四十五歳、此年二月、波多野義重公、非常に盡力せられ、深山幽邃の地所を選び、礎石を固め、柱石をなし、間もなく普請の落成を告て、七月十八日には誠に隆んなる晋山上堂の法式を行はせられました。時に寺號を傘松峰大佛寺と名け、九月一日には法堂落成し、僧堂も竣工いたしましたして、十一月一日には、傘松峰を改めて、吉祥山と稱へた、其時の大師の尊偈があります。

諸佛如來大功德。諸吉祥中最無上。諸佛共來入此處。此故此地最吉祥。又寛元四年六月十五日に至り、大佛寺を改めて永平寺と稱し玉ふたのでありますが、其時又法語があります。

天有道以高、清、地有道以厚、寧、人有道以安、穩、所以世尊降生、一手指天一手指地、周行七步曰、天上天下唯我獨尊、世尊有道雖是恁麼、永平有道大家證明、良久曰、天上天下、當所永平、

之の如く、愈々永平寺創業の成就せし後、開基義重公に對しての、御告げの語があります。

「此一片の田地、主山は北に高く、案山は南に横ふ、東岳は白山の神廟に連なり、西流は蒼海の龍宮に曳く、吾在宋の時、天童先師坐禪の法要三十餘箇條を示し玉ふ、其一に云く、大海を視ること莫れ、青山谿水を見るべしと、此地此記に應ず」

斯様な御言ばてありましたが、全體我大師が北越の深山幽谷に、御入遊ばされたのは、深き御意の存することであり、夫は北陸道は、北日本と謂て、兎角風俗兇險人心叢昧、常に暴力を弄し、南日本を強制せんとします、それで此の土地を特に布教佛法の地として選ばれた。又た本師天童如淨禪師は、越の國の人ゆゑ、越前は其の語呂に相通じます所から大師は如淨禪師を慕ひ玉ふの餘り、奇縁なり、奇遇なりとて、速かに此の深山に入り玉ふたのであります。

是如く山號寺稱を改め、斯る深山幽谷の間に、廣大慈悲の化門を開かれたのは都や城下の隆んなる所の傳導ばかりではなく、眞實此の山間僻地の民に至るまで、眞個の正法を開示してやらうとの民衆思想から出てゐるのであります。世間多々ある布教家の如く、權門に媚び、王侯に倂り、名聞利養を先とし伯爵侯爵を以て得たりと

する、俗士も尙忌み厭ふ様な、名利の穢らはしき、似而佛法は大嫌ひぢやとの思召しである。而して一牛黒の衣に鼠の袈裟、只一衣一鉢て、衆生濟度の本分を盡し玉ひ、平民的傳道に盡されたのであります。世の俗眼より之を眺めて、聲聞の如く、或は仙人の如く、或は厭世行者の如く、見る者あらば、實に大師廣大無邊の尊慮を知らざるもので、到底擧げて論すべきでありませぬ、大師が斯る深山幽邃の境、人跡不到の地に在しましてさへ、常々道俗四衆の御化導を受くるもの、一千餘人に下らずと申します、之れ實に大師が光を韜み徳を晦まして、平民的傳道の思想に富ませられたる所以であります。

第五節 勤王の精神

寶治元年丁未の七月、時の將軍鎌倉の執權北條時頼公、特に使者を永平寺に遣して、自ら弟子の禮を盡し、頻りに大師を懇請致しましたので、同年八月三日、山を下り、鎌倉に御飛錫になつた、時頼公は勿論、多くの道俗非常に悦びまして、授戒聞法

して、得道するもの少なからず、殊に時頼は授戒入道して大師より道崇と云ふ號を賜りました、又或時教外別傳と云ふ請問に、御示し遊ばされた御歌に
 あら磯の波もえよせぬ高岩にかきもつくべきのりならばこそ
 と、あります。此歌を鎌倉の道俗聞傳へて、非常に感嘆いたしたと申します、時頼は一寺を建立し大師の御留錫を請ふたるも御止住なく、つひに越前に御歸りになり、大師の御徳を慕ふて、大宋の蜀の國より隨從して参りました道隆蘭溪と云ふ僧を、鎌倉に止めて、住持せしめられました。即ち只今、鎌倉五山の一つである臨濟宗の一本山なる、建長寺であります、而して其翌年、寶治二年二月下旬、鎌倉を辭し、三月十三日永平寺に御歸錫になりましたが、其時の御言ばに「今日歸山雲氣喜愛山之愛甚於初云々」と仰せられましたので、此當時の事を追想いたしますと、承陽大師の勤王の御精神に富ませらるゝ事が、實に思ひやられます。

抑々失れば、如何なる次第であるかと申しますと、諸士能く御聞き取りを願ひたいのであります、母君様の一切の人々をして、上四恩を報答せしめ玉へとの、御言ばも

此の一段に至りて深く思ひ合さるのであります。

大師の生家久我家と皇室との關係は、實に申し上げ様のない御篤い間柄であります。即ち大師の父通親公が、始め御白河天皇に事へたまひしより、土御門天皇に事へたまふまで、前後七朝に亘り、其中に就て、高倉天皇は、殊に眷顧せられ、尋で天皇の御子後鳥羽天皇亦、公を殊寵し、公の女、在子姫を納れて中宮となし給ふた。之れ即ち承明門院であつて、土御門天皇の御生母、大師の女兄であります。故に、天皇は大師の御外甥に當られます、天皇又大師の長兄贈左大臣通宗公の女を納れて中宮としたまふた、之れ即ち御嵯峨天皇の御生母にして、大師の姪女であります、又順德天皇は土御門天皇の御異母弟にて、御幼少の時より、通親公が其大傅として、常に御補導遊ばしたのであります、又中恭天皇は順德天皇の御子にて在らせらるゝ、此の如くの有様故、大師の皇室に於かせらるゝ、御戚縁は實に御篤い次第であります、此時に當りて、源の頼朝、已に薨じ其子頼家實朝相次で將軍たりしが、久しからずして、又皆薨せられまして、愈々北條義時政權を握り、鎌倉の覇業益々鞏く、天下の士民皆其

命に服しませる事になり、誠に恐れ多いことながら、朝廷は獨り虚器を擁するのみとなりました、既に我大師が御年二十三歳、建仁寺に在らせらるゝ時承久三年五月でありましたが、御鳥羽の上皇、軍を發して鎌倉を征伐せしめ玉へしが、義時、其子泰時に命じて、反て宮闕を犯さしめ、賊兵總べて十九萬、官軍敗績して京師陥ると云ふ有様、泰時、輒ち父の命を聽て、中恭天皇を廢し、御鳥羽上皇を隱岐に、土御門上皇を土佐に、順德上皇を佐渡に遷し奉りました、父子三帝各々千里の空海に隔絶あらせられ、瘴烟毒霧の間に蒙塵ましまして、終天復相見へ玉ふことの出來得ざるに至りました、其生別は即ち死別にして、實に皇室の命脈は朝にして夕を測ることの出來ぬ我國に國史ありて以來、上下殆んど三千年、未だ曾て此の如くの慘絶愴絶の時は無つたのであります、七百年後の今日を以て回想するに、猶流涕慟哭の至りに堪へないこととてあります、況んや親く皇家の恩寵を荷ひ、前後四帝に戚縁を辱なふし玉ふ大師にして、其當時目前に、此の慘絶愴絶の状況を觀はし玉ひしときは、血涙潜然として下り、九腸爲めに寸裂するの思ひがあつたこと、思ふ。實に北條義時の如きは、無前

の逆賊にして、其當時の習俗は絶後の險惡暴戾でありました、彼の所謂、諸國の守護及び莊園の地頭なるもの、假令、鎌倉の選任に出るとは云へ、皆王民の租税に衣食し王土の警護を職とするのである筈、然るに承久の役起るに及び、此輩皆鎌倉の命を聽き、戈を四朝の天子に倒にし、常に王民の租税を以て養ひつゝある兵馬を以て、王室に反噬のなすを大師は眼前に觀はし、無限の感慨勃々として、始終胸臆に充塞あらせられたのでありました、故に大師は方面を變へて、即ち佛教の廣大無邊なる、此眞理を擴充して、經國の基を樹て匡救扶濟せられんとしたのであります、故に大師は時頼の請に應じて、鎌倉に行化遊ばさるゝや大義名分を明かにして、上下君臣の大本を全ふし、大政を返上して、上下和衷、能く我帝國の國體を鞏固にして、益々國憲を擴張し、庶民を泰山の安きに就かしめんとすの御誠意にて、洵々として、時頼を御接化遊ばされましたのでありませう、之れ實に大師の皇室に御威縁の篤く在らせらるゝに基因するが如くなれども、正に勤王の御誠意に富ませらるゝの致す所にして、他の緇徒の遠く窺ひ知ることの出來得ざる、御賢慮て在らせられたのであります、故に、我が大

師は日々御祈念の御言ばが「皇風永扇、皇道遐昌、佛日增輝、法輪常轉」どの御誓であつた、此の御一句に依るも、如何に勤王の御誠意に富ませられたるかを想ひはかることが出来るのであります、此鎌倉時代の祖師方が、或は榮西禪師の興禪護國と云ふも、法然上人の他力本願と云ふも、親鸞上人の王法爲本と云ふも、日蓮上人の立正安國と云ふも、皆我教を宣布せんとの本旨より出ることであるが、我が大師の誠意は、更に我教宣布の上より許りてなく積極的に勤王愛國、濟世利民の上より出るのでありますから、他の祖師方とは、大に異り、徹頭徹尾忠君愛國の赤誠、即ち勤王の御精神に富ませらるゝと謂て過言ではないのである、殊に諸士の御承知の通り時頼は非常に大師の御徳を慕ひ、御歸山の後越前六條の堡、二千石の地所を大師に献上し、永平寺の地領に寄附せようと致して、寄附狀を書いて、玄明と謂へる僧に贈られた、大師は之を拒絶された、その眞意は、普天の下王土にあらざるはなく、卒士の賓王臣にあらざるはなし、今や鎌倉家の政權を掌握し、天皇はすてに上に述べたる如く悲惨な境遇に在せば、北條家は直に皇室に對する怨家である。永平如何に貧なりとい

へども、盜賊の上前は一粒もいらぬとの御見識なるべしと、恐察申すのであります。又此の玄明が喜んで寄附状を持来て、大衆に吹聴せしに、大師は其玄明首座を叱責し玉ひて、爾が喜悅の心、頗る拙劣なり、恐くは耻辱を大法に貽さん、汝速に出て去れとの御言ばにて、忽ちに法衣を脱せしめ、寺内を追出し、加之玄明の坐禪せし單を毀ち、床下の地七尺の土を掘り埋められたと傳へられてゐる、之れ畢竟、勤王の精神の發露であります。

更に大師の意中を伺ひ奉れば、寶治二年三月十三日鎌倉より永平寺に御歸りになりし、其翌十四日上堂の語に

『山僧昨年八月三日山を出て、相州鎌倉に赴き、檀那俗弟子の爲めに説法す、今年今月昨日寺に歸りて、今朝座に上る、這の一段の事、或は人あり疑着せん、幾許の山川を渡りて、俗弟子の爲めに説法す、俗を重んじ法を輕んずるに似たりと、又未だ曾て説かざる底の法ありと疑はん、只他の爲めに説く、修善の者は昇り、造惡の者は落つ、修因感果、埽を抛ち玉を引くのみ』

と、之れ實に我が大師、鎌倉の教化は、正に因果應報の道理を説き、君臣の大義名分を明かにし祿を奉還して、天下の大權を天皇の一途に歸せしめんと、忠君愛國の赤誠、即ち勤王の精神に富ませらるゝの致す所であります、夫れ故に大に時頼を薰化遊ばされ、又時頼は實に大師の徳化によつて信仰を鞏固にし、菩薩の大戒を受けたのである、故に時頼公の巨福山の祈願の文に

我子孫能く佛心宗を奉せば、系胤益昌ならん、蓋し家門と禪門と盛衰をなさんと誓はれ、其後時頼は身に法衣を纏ふて日本全國を行脚せられ、實地に人民の疾苦を視察し大ひに塔に安んずることを得せしめられた、之れ正に我大師の感化と云はねばならぬ、それ故に、時頼の意中には、大政奉還の本旨は領したのであらうが、未だ時節が至らない、即ち社會の趨勢如何んとも致方がないのである、依て大師は必ず他日幾百年の後には、此最大素願の御誠意が貫徹せんことを期し玉ふたものと窺ふのである。鎌倉に在られた時の偈に

半一年喫飯白衣舍。老樹梅花霜雪中。驚蟄一聲轟霹靂。帝卿春色小桃紅。

とある。此一絶の句中にも自ら大師の御誠意が溢れて居ります、帝卿春色小桃紅との結局は、今日之れを拜吟しても、實に嬉しく感じられるのであります、之れによるも、母公の一切人々をして、上四恩を報答せしめ玉へとの遺誠を遵奉せる大師の國家觀は、非常に崇高なものであつたことが、容易に窺ひ得るのであります。

第六節 美術方面の趣味と殖産興業

大師は絶対真理の追求者でありましたとともに、趣味の豊饒な方でありました。その趣味のうちでも美術的方面即ち藝術生活を味ひ、又た最も現實的な社會生活等にも充分の見解を持つて居られた。殖産興業の道を構じ、自給自足して行くのを社會生活の根柢であるといふやうに御考へになつてゐられたのであります。大師が貞觀二年二月二十三日入宋の旅に上られたときの隨行者は、京都の八木下道正と伊勢の人、加藤四郎左衛門景正と外數名でありましたが、此景正と云ふ人は、從來土器を造ることを好みまして、入宋以後我大師の許しを得て、種々陶器の焼方などを研究した

ものと見へます、歸朝後は勢州に於て多少焼いて見たが、何分にも土質が適せぬものと見へ、尾州知多郡に渡り、始めは極南端なる、須佐村邊に、次に布土村邊に移り名古屋近邊に到り、所々試験をして、結局瀬戸と云ふ處に行き、始めて思ふ様に焼き得ることになりました、總て陶器を瀬戸物といひますのは、その地名が陶器の代名詞となつたのであります、只今でも尾州知多郡に參りますと、田畑などより掘り出したもので、其頃のものと思へる陶器に却て風流なのがある。茶の湯の茶碗でも、藤四郎焼と申して、大に珍重致して居ります、拙衾の獨斷かも知りませぬが、是れ畢竟大師が美術的精神に富ませ玉ふ處より、加藤四郎左衛門をして、宋土にある間、自由に研究せしめられたものと信するのであります、又大師が殖産工業の思想に富ませ玉ふと云ふは、其隨從致せし木下道正は、大師が宋にて江西の歸路、曠野に於いて、急病に罹り玉へし時、稻荷の神が顯はれて、藥を御授け申し上げ、忽ち御全快遊ばされたのであります、其時稻荷より木下道正は其の藥の練方を傳はり、歸朝致してよりは大師の許しを得て、家傳の藥となし、神仙解毒萬病圓として、今日まで年々歳々に全國に

販賣しつゝあります、是又我大師が殖産の意に富せ玉ふの一證では有りませうか
加之我大師が深草に閑居なされ、遂に宇治の興聖寺建立となり、續て永平寺建立とな
りましたが、初めは人跡不到の荒野の原が、忽に門には車馬の絶ゆる間の無いと云ふ
様なる繁華の郷と化しました。如何なる山間僻地でも大師の住るゝ處、忽ち鶏犬相傳
ふる部落をなし、殖産も興業も並び行はるゝに至つたのであります、又其伽藍に至て
は、興聖寺に於けるも、永平寺に於けるも皆支那風と日本風と折衷したる構造にて、
其美術的の優勝なる、其結構の堅牢なる、殆んど七百年後の今日より追想するに、實
に我國の工業や美術の好模範であります、之れ實に吾大師が、藝術心と社會心を持つ
て居られた證據であります、然るに今日まで我大師が他の宗派の祖師方の如く、山を
ひらき、道を造り、橋梁を架設し、或は蠶業、或は製茶と云ふ様なる、殖産的に就て
餘り聞えないのは、大師の徳化が殖産事業や美術などより幾百千萬億倍も勝れさせ玉
ふが故に、只御徳のみを稱賛し、其他の事柄を稱賛する暇がないのであります、而の
みならず他宗の祖師方は、殖産工業や或は、美術技藝等を、布教の方便として、衆生

濟度せられたのである、去りながら、或は佐渡に流されたり、越後に流されたり、龍
の口に於ての御離と云ふ様なことがある、我大師は只廣大無邊の御徳で、上天皇を始
め奉り、武門の勇士より、下山間僻地、津々浦々の賤女が臥屋の端まで、御濟度
遊ばされたのであります、故に殖産工業や、美術や技藝等を、方便に御用ひになる必
要がないのであります、それに又大師の勝れさせ玉ふは殖産興業等の思想のみならず
先づ第一は筆蹟、之は日本三筆の一として、更に弘法大師等と一步も譲りたまはぬの
であります、又漢詩和歌に堪能にて殊に又甚文章に至りては、漢文の廣録は勿論、す
でに九十五卷の正法眼藏の如きは、天下無比なる大文章であります、然るに世の人が
文章の道元禪師と云はず、和歌の佛法聖人と云はず、漢詩の佛性傳東國師と云はず、
殖産工業の日域高祖と云はず、美術家の承陽大師と云はざるは、何の爲であるかと云
へば、皆是大師が御徳の超絶にまします所以であります、故に今日の御遺蹟より、殆
んど七百年前を追想しますれば、正に我大師が美術的精神に富まれ、殖産工業的思想
に富ませ玉ふは疑ひを容るゝの餘地がない、故に拙稿は承陽大師が美術的精神、殖産

工業的思想に富ませ玉ふ點を特に明かにして置きたいと思ふのであります。

第七節 卓越せる宗義

我が曹洞宗の宗義は、元來言詮不及、意路不到の端的でありますから、僅かに文字語言に墮すれば墮泥帶水喪身失命するのであります、併し乍ら今暫らく第二義門に下つて宗義に一應の解釋を施したい、大師、嘉禎二年、丙午十月十五日、始めて、興聖寺に於て開堂拈香の示衆に

「山僧、叢林を經ること多からず、等閑に天童先師に見へて、當下に眼橫鼻直なることを認得して、他に瞞せられず、便ち空手にして郷に歸る、所以に一毫の佛法無し任運に且く時を延ぶ、朝々日は東に出て、夜々月は西に沈む、雲收つて山骨顯はれ雨過て四山低る、畢竟如何、良久して曰く、三年逢一潤、雞向五更啼」とあります。此の所謂空手にして郷に還る、一毫の佛法無しとは空手還郷無佛法の端的であります、空手と云へば、手中に一物も持たない、乃ち一經一論も持たないの

であります、が無一物中無盡藏で、其空手の中に、廣大無邊なる百千萬億の經卷、八萬四千の法藏、乃至無量無邊の大經卷があるのであります、所謂此の經卷は、大聖釋尊が降誕の時、直に天上天下唯我獨尊と拈舉し玉ひ、又菩提樹下に見明星をして、正覺を成し玉へし時、有情非情同時成道と、獅子吼聲明し玉ひ、法華會上に在ては、止々不須說我法妙難思議と示し、彌陀經の所説には、水鳥樹林念佛念法と明示し玉ひ涅槃の夕べには、四十九年一字不説との玉はれたので、皆是れが無佛法の消息であります、所謂大通智勝佛は、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道、四十九年一字不説なる、其の無佛法の中に、所謂、無量無邊説があるのであります、故に釋尊四十九年横説堅説せられたる八萬の法藏中には、無量無邊説はないのであります、四十九年八萬の法藏は、無量無邊、不可説不可商量の法門の中の、只一分のみであります、故に此端的是、唯佛與佛乃能究盡で、言語道斷心行所滅、三世諸佛も口壁上に掛く、歴代の祖師も詮注し及ばず、達摩も不識、二祖も不可得、俱胝も一指、雲門も唯一棒、臨濟も又一喝、洞山も麻三斤、或は拳頭、或は禪板、或は蒲團、又或る時は盧

陵米、有る時は鎮州の大羅浮、或る時は桃花一見、或る時は擊竹一聲、悉とく唯佛與佛乃能究盡底の端的を乃能究盡唯佛與佛せられたままでのことでもあります、故に承陽大師、或時示して曰く

『直に道ふ本來一物なしと、還て看る、遍界曾て藏るゝことを』

又或時示して曰く

『我佛を得てより來た、常に此處に住して說法す、道ふこと勿れ我宗に語句無しと、真個我は是れ謝三郎、法々位に住して、世間相常住、鴻雁回へり、林鷄出づと』

又或時示して曰く

『古經轉じ來る出息入息、古佛今現す一扇再扇、處々顯はに條々貴し、恁麼の道理、且つ作麼生か道はん、良久して曰く、天外春將暮、青々野色分、桃華千萬朵、何處覓靈雲と』

又或時上堂示して曰く

『興聖久しく衆の爲めに説話せず、佛殿僧堂溪聲樹影總て諸人の爲めに説了れり、諸人聞得すや也た未しや、若し聞得すと道は、箇の什麼をか説く、若し聞かすと道は、自己に辜負すと』

又或時上堂示して曰く

『今日山僧兄弟の興めに、上堂一上して用て、十方一切の三寶、西天の四七、東土の二三、天下の鼻孔、古今の眼睛、乾屎橛、麻三斤、禪板蒲團を供養す、上來の梵修無限の勝因、蝦蟆跳て梵天に上り、蚯蚓走て東海をすぎ、雲來水來、馬と作り牛と作るに回向す、十方三世一切諸佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜』

又或時示して曰く

『粥足り飯足り神通妙用、雲來り水來る現身說法、作麼生んか是れ恁麼の人、良久して曰く、分疏不下、雍容を得たり』

又或時示して曰く

『佛々祖々單傳の大道、親故未だ知らず舊識未だ説かず、甚んとしてか恁麼なる、有と道ひ無と道ふ、四句百非、思量不思議、佛量不佛量』

又坐禪儀には示して曰く

「箇の不思議を思量せよ、不思議如何か思量せん非思量、此乃ち坐禪の要術也」
是の如く、我大師の拈提されし乃能究盡底の端的を述べ來れば、限りのないことであるが、這の乃能究盡底の消息は、唯編自明了、餘人所不見で、所謂水を飲んで冷暖自知するより致方がない、此の端的をば、當昔靈山會上に在ては、釋尊金波羅華を拈じて唯佛與佛乃能究盡し玉へ、迦葉尊者は破顔微笑して、乃能究盡唯佛與佛し玉ふたのであります、夫より嫡々面受面稟して、西天四七東土二三、遂に五十一傳して我承陽大師に至り、即ち如淨禪師より乃能究盡、唯佛與佛、嫡々面稟面受、師資二面裂破し乃至五十一代、釋尊まで、悉く面受面稟、唯祖與祖、裂破二面して、父少子老、前に釋迦なく、後に彌勒なく、上三世諸佛なく、下六道衆生なく、生佛一如、迷故不二、修中に證あり證中に修あり、修證一にして不二、不二にして不一、生死に生死の相なく、菩提に菩提の相なく、更に其不二一如をも打破し來て、堅究三世横亘十方、天地同根萬物一體、那伽大定の王三昧であります、我承陽大師這の王三昧に安住し、這の

王三昧を擧揚し、這の王三昧を以て、一個半個を接得し、這の王三昧を以て、人天を教化し、衆生濟度遊ばされたので、是れが正に我承陽大師の宗義であります、故に此の端的を言はんと欲すれば、満口に霜を含み、啞子の苦瓜を喫するが如く、思議すれば三十棒の分あり、大小の量を越へ、有無の邊を絶し、微塵を破て大經卷を出し、一毛端上三世諸佛同死同生して、最大法輪を轉じ玉ふのであります、夫れが故に空手にして郷に還る一毫の佛法なし、只當下に眼横鼻直なることを認得するのみと、故に這の王三昧を開示して、坐禪の儀を明し玉へしに

「道本圓通、爭か修證を假らん宗乘自在、何ぞ工夫を費ん」
とある。如是の宗義なるが故に、各宗各派の祖師方が、一經一論に依て宗義を建立せられ、或は七字の題目を唱へ、或は六字の名號を唱へて、成佛作祖すると云ふ意味とは大に趣きを異にする、此故に各宗の祖師も大師に參せられた。彼の由良の法燈國師の如きは親しく弟子の禮をとられたのであります。法燈國師年譜を見るに

「仁治三壬寅年、師三十六歳、城南深草極樂寺の元和尙に依りて菩薩戒を受け、元

入宋の時、天童淨和尚に従ひ、相傳の血脈なり、元は即ち永平寺開山佛法上人なり」とあり、又淨土宗鎌倉光明寺開山、然阿上人のことは高僧傳、即ち十五卷目の中に「鎌倉光明寺の開山、然阿上人良忠は、法然房の弟子なり、永平寺の道元に參じて教外の法を問ふ」

と書いてあります、又日蓮上人の年譜には

「曹洞の道元、宋より歸て宗を都下に唱ふ、大士往て其道を問ふ」とあり、又親鸞上人の俊光院に贈るの狀に

「此間、深草の佛法房に參じ、實相一如の妙を了得する故、勸化の趣き面白く、まことに覺え候、夫れて佛法は、鳥の空に行くが如く、四相を離れ有無を脱するを、法

に信心の人とは申候、少しも限りあるは、鳥必ず籠中に入事に候、能く能く實相の妙躰に歸入致さるべく候、穴賢々々」

とあります、以上列擧せる文献的考證に就て見るも我宗の宗義の卓越せる一般が明か

てあります、誠に我が大師の空手還郷と示ふ這裡の端的には、無量無邊、不可説、不

可商量の法門が、包含されてあるから、此端的が即三世の諸佛、法界の衆生と、同

死同生の不染汚なる、王三昧の轉法輪であるのであります、故に拙稿は、更に大師の

著作によつて、大師の宗風を彷彿せしめたいと思ふのであります。

「老梅樹老梅樹、長養枝々葉々春、兀地一機歷々、莊嚴三昧塵々、柱杖頭全無節目、蒲團上有一方身、弄鳳毛而、捉得天童鼻孔、入虎穴而、一笑大休口唇、住山碩石、叢林陳人」大師自讚。

「氣字爽清山老秋、井驢相觀曉蟾浮、一無寄一不收、任騰々粥足飯足、活鱧

々正尾正頭、天上天下、雲自水由」大師自讚。

「日面月面也道、佛面祖面也道、對面是道得、道得是對面、直下當陽、元

來頂顛、道也丹履同成矣、證也曉天一悟矣、誰道團團心、但道砥這是」大師自讚。

「鼻高於山、眼明於珠、頭匾似扇、脚尖如驢、入室愛舉臭拳、陞堂借力拄杖、

遇乞水人指天井、遇覓飯人與應量、昔因護持雞狗等戒、今日偷得佛祖屈胸、

紛々林下錯商量、笑殺靈山那一瞬」大師自讚。

承陽大師を懷ふ

四三

「説玄談妙総掠虚、忘言獨一座口如槌、初非把一定誇孤一絶、百草頭邊盡發揮」
與フ士侍郎ニ

「世事茫茫盈又虧、道人到此不會知、鐵牛鏡斷天河水、頂上昆盧脚下隨」

「聞一思修入三摩地、自己已端嚴現聖眼、爲告來人明此意、觀音不在補陀山」
詣昌國縣補陀洛山因題曰。

「無明誰惡草頭露、實相元來此裡真、留得難知流水衣、結來易變承當身」與禪人

「玉人夢破曉雲窓、夜月霧消殘露空、獨覺寒床無限意、風光凄斷寂寥中」同

「觸目遇緣盡是親、經行座臥鉢全眞、有人若問箇中意、法眼藏中一點塵」閑居偶作

「西來祖道我傳東、釣月耕雲慕古風、世俗紅塵飛不到、深山雪夜草庵中」山居

「夜坐更闌眠未熟、情知辨道可山林、溪聲入耳月到眼、此外更須何用心」同

「久在人間無愛惜、文章筆硯既拋來、看花聞鳥風情少、一任時人笑不戈」

「教外別傳」荒磯の波もえよせぬ高岩に、かきもつくべき法ならばこそ
「不立文字」いひ捨てし其言のはの外なれば、筆にも跡をとどめさりけり

「正法眼藏」波もひき風も繫がぬ捨小舟、月こそよはの盛りなりけり

「涅槃妙心」いつもたゞ我古郷の花なれば、色もかはらず過し春かな

「本來面目」春は花なつ郭公秋は月、冬雪さへて冷しかりけり

「即心即佛」かもめどもをしともいまだゆえわかぬ、立る波間に浮沈む哉

「應無所住而生其心」水鳥のゆくも歸るも跡たへて、されども道は忘れざりけり

「父母所生身即證大覺位」尋ね入る深山の奥のさどどもと、我すみ馴し都なりける

「盡十方眞實人體」世の中にまことの人やなかるらむ、限もみへぬ大空の色

「靈雲見桃花」春風に綻びにけり桃の花、枝葉にのこる疑ひもなし

「坐禪」守るとも思はずながら小山田の、いたつらならぬ僧都なりけり

「詠法華經」夜もすがら終日になす法の道、皆この經の聲と心と

「同」溪の響嶺に鳴猿たえだえに、たゞ此經を説とこそきけ

「同」この經の心を得れば世の中に、うりかふ聲も法を説くかな

「同」峰の色溪の響もみなからに、我釋迦牟尼の聲と姿と

「雜詠」心とて人に見すへき色そなき、只露霜の結ぶのみにて
 「同」いかなるか佛と云と人間ば、一かひやがもとにつらゝゐにけり
 「同」春風に我言の葉の散りけるを、花の歌とや人のみるらん

第八節 大師の御聖徳と靈應瑞化

「人間の如來は人間に同ず」と大師は正法眼藏に示されたるが、此の言葉は轉じて大師自らのことと拜察出来るのであります。大師の聖徳によつて大師の偉業が成就せるは勿論ながら、大師の偉業には必ず、佛陀薩埵の出現擁護と、天神地祇の應現加護と諸天善神の隨喜讚歎があつて、始めて衆生濟度が出来るのであると信じます、故に以下暫らく大師一生の靈現的方面を觀察したいと思ひます。大師が天童淨祖に相見して大悟徹底されたのが寶慶三年丁亥の冬であります。それより御歸朝を思ひたゞれ、如淨禪師に御乞暇の時、大師は丈室に上り、焼香禮拜涕淚悲泣遊ばされ、愈々歸朝の意を述べられた、如淨禪師も、無限の感懷を催し遊ばされ、之を聽許し其夜半三更入

室を許され、祖門屋裡の秘寶秘物、即ち芙蓉楷祖の袈裟、寶鏡三昧、五位顯訣、並に如淨禪師自讚の頂相、等を授て「汝は異域の人なるを以て、之を授けて信を表す、歸國して化を布き、廣く人天を利せよ。城邑聚落に住すること莫れ、國王大臣に近くこと莫れ、只深山幽谷に居して、一箇半箇を接待し吾宗をして、斷絶致さしむること勿れ」と親囑されたのであります。此の示訓を體して大師はその生活を高持せられたことは争はれぬ。此の異域の僧に法を傳へたといふことに、既に佛陀の加護のあつたのは明かであるといはねばなりません。

此時の芙蓉楷祖の袈裟は、今現に傳はりて豊後國泉福寺にあります。寶鏡三昧は洞山大師の垂訓、五位顯訣は曹山大師の教示であります。自讚の頂相は、如淨禪師の眞影に、淨祖自ら題讚し玉ふたのであります。

拙僧は淨祖と大師との關係を正に久遠劫來の因縁會遇と思ふのであります。如淨禪師の、天童山へ住山し賜へしは、我承陽大師入宋の三年目であつて、大師御歸朝の翌年は、早や入寂し玉ふたのである。故に云はゞ、如淨禪師は我大師へ面受面稟の爲め

特に天童山に出現しまして、我大師は如淨禪師へ親參の爲め、特に入宋遊ばされた様なことにて、正に之れ如淨禪師の出現應世も、我大師の聖德偉業を成就せしめんが爲めに、諸佛如來の化現と云ふも、敢て誣言ではなからうと思ふのであります。

大師を靈的に見る時に先づ第一に碧巖助筆の白山權現の事を擧げねばなりません。丁度明日は時は大師が歸朝の志を懐いて、日本の商船は慶元に碇泊して居ります。丁度明日は解纜せんとする夕べのことであり、大師は道友の許にて、佛顯圓悟禪師の碧巖録をば一覽遊ばされ、其拈提評唱等、都て氣韻の格逸せるをば、非常に感歎遊ばされ、借りて我寮に御持歸りになり、筆寫をしましめたが只一夜の事で、到底寫了る見込もないのであります。此夜一人の白衣の神人が化現して、助筆し、夜の明くる頃には悉く謄寫了つたのである。大師は深く喜び、神人に謝して其名を問はれたる吾は是れ日本の白山神なりと言訖つて忽然として姿が消えたのであります。此碧巖録は今現に一夜碧巖と申して、加州金澤の大乗寺に秘藏致して居ることであり、是即佛陀神明の化現して、我大師の聖德偉業を成就せしめ玉ふたる一例であります。

次に稻荷神の化現であります、それは既に前項に述べたる如く、我大師大宋にて處處遍參の折り、江西の曠野を過ぎ給ひし時、急症に罹り玉ふた、已に九死に瀕せられたが、白衣の神姫在り化現して薬を授け、道正之を捧げ、大師之を服し玉へば病忽ちにして癒ゆ、道正誠まことに喜び神姫に謝して、其名を問へば、吾は日本の稻荷神なり元公求法の大願に感じ、常に擁護し奉るなりと、答ひて其薬方をば道正に傳授致したのである、故に道正歸朝の後、稻荷の神祠を庵の邊りに建設して、年々祭祀を營み又神授の靈薬をば、製して家傳となし、今日に至るまで、日本全國に頒賦せられてる神仙解毒萬病圖が即ちそれであり、

次は猛虎の難であります、それは我大師江西に行かれた時、日暮になんなんとするに、猛虎に遭はれた。猛虎は牙を鳴らして、大師に迫り既に危かつたのであります、時に大師は持合の柱杖を抛げ、傍らの岩石に端座せられた所が、猛虎は靜かに逃げ去つたと云ふことであり、其柱杖を「虎はね」の柱杖と申します。

此の一話も、大師御在世中は知る者もなく、大師滅後寒岩義尹禪師入宋なされたる

時、大宋の或る叢林に於て、龍頭に一僧の端座して、其面前に猛虎の柱杖を噛み居る圖を見て、何心なく問玉へば、答ひて曰く、之れは前年日本より渡り來れる道元と云ふ僧でありますと、悉しく其因縁を語りて、今大宋諸方の叢林にては、各所にて已に尊崇すると申せしと云ふ、依て寒岩義尹禪師は、大に感激して、自ら之れを寫して、歸朝せられた、今其古寫圖は天津の青龍寺の、寶物となつて居ります。

次は韋駄將軍の化現でありますが、大師或時行化の因みに、一人の神童ありて、道傍に化現して、大師に告て曰く、聖者道業既に業に成熟す、速やかに日本に歸り、大法を弘通して人天を化益し玉ふべしと、大師其名を問賜へば、對て曰く吾は韋將軍なりと、言訖て其形見へす蓋し韋駄尊天であります、今日全國の吾宗門の寺院にては必ず庫堂に祭るのであります、拙衲も支那臺灣に參りましたる時、各大山名監には、必ず立派なる尊像の安置しあるを見たのであります。

次は大權修理菩薩であります、已に我大師は天童山を辭し玉ひ、船に乗り江を下り船招寶山下を過ぐる頃、忽ち一神人有り舳に現す、所謂峨冠盛裝、右手を額に捧げ、予は是れ大權修理菩薩である、貴師今、佛心印を傳へて本國に歸り玉ふ、予隨從して以て、大法を擁護し奉ると告げたのであります、是れ我宗寺院に、必ず安置する大權菩薩であります、支那では之を護塔の神と云ふ、即ち堂塔伽藍を守護するの意味である。開宗の上に大切なる護法愛宗の精神であります、護法善神は、此の精神の結晶であります。故にこそ大師の聖德偉業を成就せしめんが爲に出現せられたのであります。

次には觀音菩薩の化現であります、已に大師の坐乘し賜ひし船、大平洋に出るや、水天一色、渺として際涯なく、只日輪の出入を見て、漸く東西を分つのみにてありましたが、豈に圖らんや、天の一方より黒雲起り、忽ち大空に彌漫するや、颶風暴雨、怒濤狂瀾、實に物凄き有様、船は幾度か覆へらんとして、滿船叫喚悲慟し、恰かも九死に際せしが如し、時に大師、船舷に默然端坐ましますれば、忽ちに觀世音菩薩、一片の蓮葩に乗じて、船頭に顯現し玉ふ、然るに不思議なるかな、少時にして風雨收まり波濤靜かに、遂に此危難を免かれ玉ひて、十數日間、風順に波穩かに、肥後の川尻に

着き賜ふ、大師上陸し賜ふや、觀音淨聖に感謝し賜へて、尙且つ海上に於て、拜せられたる尊像を、彫鑄し賜へて、川尻の寺に安置し賜ふ、是れ乃ち、只今の南溟山觀音寺であります、其後、住持其尊像を拜寫して、大師に贊を乞ふたのである、大師讚して曰く

一華五葉開。一華一如來。弘誓深如海。回向運三善財。

南溟山觀音寺にては、之を版行して、廣く十方の信者に施すことに致して居りますが之れ又た、大師と觀世音淨聖とは、唯佛與佛乃能究盡ましませしことにして、實に大師の聖德偉業を成就せしめ玉ふ、大薩埵の感應道交、顯現應同ましませしにあらざして何ぞや。

偕て、大師は愈々御歸朝になりて、建仁寺より深草、深草より興聖寺、興聖寺より越前に移り玉へて、愈々永平寺建立に成て、大法輪を轉じ賜ふとき、種々なる不思議靈應奇瑞の顯現せしは、正に大師が人間の如來は人間に同じて出現まします、乃ち幾百千年不世出の大聖にましますに、基因することなれば、三世の諸佛、恒沙の薩埵、

瑞化靈應ましまして、正く大師の聖德偉業を、隨喜讚歎、擁護ましますのに外ならぬのであります、今其二三を列舉しますれば

第一天華亂墜のこととあります、寛元三年、乙巳四月十五日、既に伽藍完備し、結夏の上堂し賜へしとき、其前後に於て、天華亂墜したので、輪下の衆僧、參拜の道俗皆其稀有にして、殊勝なることを瞻仰せざるものはなかつたのであります。斯る事は往昔釋尊說法の時には、時々之れありしことにて、大地は六種に震動し、天華亂墜せりと云ひます、支那及我朝に於ても、間々之れありと申します、且つ世俗におきましても、諸士の御承知の通り、徳川家宣公の葬儀を、東京芝増上寺に營みし時、天華亂墜致したと云ひます、其状は薊の花に似て金色の光りが在つたと云ふことであるそれは兎に角、我大師の結夏上堂に、天華亂墜は、正しく薩埵神明の、讚歎瑞化と云はねばならぬのであります。

次には彩雲の變難たることとありますが、之れは寛元五年正月十五日、大師、布薩を御修行遊ばされ、説戒し玉ひし時、五色の彩雲ありて、丈室當面の障子にたなび

けりと云ひます、其間は、今の午後零時より三時までとありましたが、實に稀有殊勝のこと、云はねばならぬ、夫れ故、河南の莊、中之郷より、參詣せし人々は、此祥瑞を將來に傳へんとて「志比方丈不思議日記」と云ふものを書いて、貽したと云ひます、又大師高弟の孤雲禪師は、自筆にて、端現記と云ふものを記し置かれ、今は越山の寶庫にあります、是實に、諸佛諸菩薩諸天善神の、靈應現化ましまして、大師の化儀を讚歎し玉ひしに、外ならぬのであります。

次は、僧堂内に異香馥郁たることとありますが、それは寶治二年四月より、同十一月十二日に至るまで、永平寺僧堂内に於て、時々殊勝なる異香、馥郁せしと謂ひます、之れ即ち、薩埵神明の、大師の化儀を讚歎隨喜し、供養供敬なし玉へしに外ならぬのであります。

次は、羅漢尊者の瑞見であります、それは乃ち、寶治三年正月元日、大師永平寺に於て羅漢尊者の大供養會を御修行遊ばされた時、釋迦牟尼如來の御木像を始め、十六大羅漢尊者の木像、畫像、皆な悉く大光明を放ち玉へり、又それと同時に十六大

羅漢尊者は諸の眷屬を率へて東方山麓の長松の上に、化現し賜へりと云ふ、後世之れを羅漢松と稱へた、今は枯れて其形を見ないのであります、大師六百回大遠忌の時、其松にて笏等を造り、參拜せる門末の、或る人々に下し玉はりしと云ふことで、其大光明を放つたる木像は、常に方丈に奉安せられたる者にて、其畫像は、大師在宋中に、理宗皇帝より、贈られたる、李龍眼の絶技になりたるものにて、今は常陸の國金龍寺の寶物となつてゐる、之れ實に釋尊と、十六大阿羅漢尊者の、共に大師の化儀を隨喜讚歎して、瑞現應供ましまして、外ならぬのであります。

次には、靈山院の鐘の聲であります、それは建長三年正月五日、子の刻、大師永平寺の末院なる、靈山院の庵室にて、花山院の宰相入道と、其道俗とを御接化遊ばさるゝ因み、誰れ撞くともなく、山奥に鐘の音の聞ゆること、殆んど二百聲ばかりなり、宰相入道は、頻りに感歎し、實に不思議の感に打れたと云ふことで、其後檀信徒の者より、此靈鐘のことを、大師に御拜問申し上げたれば、之れは左のみ珍らしきことではない、七八年以來度々のことなりと仰せられたそうです、是れ即ち薩埵神明の

我大師の聖德偉業を擁護し、化儀を讚歎隨喜ましましてに、外ならないのであります。

以上の祥瑞靈應は、實に我大師が、幾百千年不世出の大聖に在しますに依り、三世の諸佛、恒沙の薩埵、天神地祇、護法聖者の、讚歎擁護ましまして、大師の聖德偉業を圓滿ならしめ賜ふにあらずして何ぞや、之れ乃ち、拙衲か今大師の御聖德、佛陀神明の靈應瑞化在らせらるゝと云ふ所以であります。

第九節 大師の示寂と其の遺德

「無上菩提は、自の爲めに非ず、他の爲めに非ず、名の爲めに非ず、利の爲めに非ず、然り而して、一向に専ら無上菩提を求めて、精進不退なる、是れを菩提心と名く、既に此心現前を得れば、尙ほ菩提の爲めに菩提を求めず、此れは此れ眞實の菩提心なり」

又或時示しての曰はく

「行者自身の爲めに、佛法を修すと思ふ可からず、果報を得んが爲めに、佛法を修すべからず、靈驗を得んが爲めに、佛法を修すべからず、但だ、佛法の爲めに佛法を修す是れ道なり」

と、又或雪夜の頰に示しての曰はく

「桃李假娟我曷憐、松杉失翠或可愴。道人忘却紛飛意、名利拋來數十年。」

と、是等の親訓に依るも、大師は専ら名聞を捨て、利養を抛ち、偏へに淨祖の御親訓を守り、城邑聚落を辭し、國王大臣に近づかず、越の深山の其奥に入り、世俗紅塵を避けて久遠實成の徳に加ふるに韜晦の聖德を培はれたのであります。又た

立よりて影もうつさじ溪川の流れて世にし出んと思へば
山すみの友とはならじ峰の月かれも浮世をめぐる身なれば
の二首にも御聖德の一端が現はれてゐます。

併し乍ら幽澗の秀蘭は、其香馥郁として、藏せども自ら薫微するが如く、既に我大師が、興聖寺に化門擧揚の時には、四條天皇より「興聖寶林禪寺」と云ふ御勅額を賜は

り、更に永平寺に御化導あらせらるゝ時は、建長二年大師御歳五十一年、道風益々遠近に聞へ、四方の道俗化益に浴するもの、其幾百千なることを知らず、爲めに其徳風を欣仰し玉ひて後、嵯峨天皇は勅使を永平寺に差遣し賜ひて、紫衣及佛法禪師の徽號を賜りました、然れども、大師は固く辭して之れを受けさせられず、天皇大に感嘆し、更に宣旨を下し玉ふに大師は重て固辭した、然るに廟堂の議は、更に之れが舉行のことに決して、三たび勅使を差し遣はされたのであります、大師の俗兄なる、大政大臣通光公は既に斃じ玉へて、其子大納言道忠公大師の勅命を固辭し玉ふを聞き、權大納言通行、權大納言顯定、權中納言通成、權中納言雅光、參議顯良、右近衛中將雅忠等相會し、種々協議を凝らし、我大師の下に急使を馳せて、申述ぶるには、

「先般御勅命を固辭し玉ふこと兩回、吾等誠に恐懼の至に堪へず、日夜切に之を憂ふ、今又強て御宣旨の事あり、勅使既に京地を發して、御山に向て途に就けり、抑も大師の恩命を辭し賜ふは、固より佛祖の先蹤に従ひ、榮譽顯赫の名聞を避け玉ふには相違なかるべし然れども大師にして、若し吾久我家の出にあらせられざる時は

人或は之を議することなかるべきも而かも我家より出て賜ひし大師にして、三たび勅使を奉ぜられざる時は、自然累を久我家に及ぼすものにして、又世人の言を如何にすべきか、實に勅命を固辭せらるゝは、榮譽顯赫の名聞を避けらるゝに在りと雖も、再三に及ぶ時は、世人或は却て名聞を銜ひ玉ふと謂はんも計り難し、面して優渥なる勅使を如何にすべき、願くば速かに錫を飛ばして勅使を途に迎へ、直に恩命を拜せられ、又參内して厚く天恩を拜謝し賜ふべし」

との懇切なる言上でありました、依て大師は止むを得ず、其言の道理なるに服し玉ひて、遂に山を出て、今莊驛まで勅使を迎へ、紫衣及び徽號の勅賜を拜受し玉へ、勅使を篤く劬ふて、歸山し玉ふたのであります。其時の偈に

永平雖ニ谷淺シ 勅命重重重
 卻被ニ猿鶴笑 紫衣一老翁

と、大師の高潔なる心中は實に斯くの如くでありました、後に參内して聖恩の洪大を謝されたのですが、紫衣は一生被着せず、徽號も自稱されたことは一度もなかつたのであります。

此紫衣は佛門最高の法服であり佛法禪師との徽號は限りなき恩命であります、然るに我大師自ら徽號を稱せられたることなく、又一生涯紫衣を服されたることなきは、大聖世尊が百歳の壽命を八十歳にして涅槃に入り賜ひて、二十年は末世の兒孫に遺されし功德と同じことにて、其聖徳の勝報を、後世の法子法孫に貽し賜ふに外ならないのであります、所謂永平は半杓の水を惜むと、只半杓の餘瀝を、後世の兒孫に貽し賜へしに外ならないのであります、如何に大師韜晦の御聖徳の洪大なることは、此一段の因縁に依りても、明なることであります。

偕て、之れより進んで、其入滅及滅後の消息に就て、御話しに及ばんと思ひます、建長五年、大師御年五十四歳、示滅の時機迫れるを知られ、自ら八大人覺を編述し、此年正月六日輪下の諸の弟子、及び宿縁の道俗を集めて、篤き御訓誡を垂れられ、同年七月十四日、永平寺の法席を二祖孤雲禪師に譲り、以て大法の擧揚を附屬遊ばされ、又大師自ら綴られたる袈裟を以て、之を二祖禪師に傳附し玉へて、大法の嗣承を顯詮遊ばされたのであります、大師の四大不調を聞かや、波多野義重、其他の道俗痛

心措く能はず、切に京都に入りて、静養あらせられんことを請ふこと數回、大師豫め自ら入滅を期し、此の哀求を容れ賜ひて、八月五日山を下りて、京都に入られました途中吟詠に

十年喫飯永平場。七箇月來臥病牀。討藥人間暫出嶠。如來授手見醫王。
又、已に木目峠を御通過遊はさるゝ時の御詠に、

草の葉に首途せる身の木の目山、空に路ある心地こそすれ
と口すさみ玉ひつゝ、遂に無事京都に入着し、高辻西の洞院俗弟子覺念の館に投じられた。

此の時、後嵯峨の上皇は醫官を差し遣はし玉ひて慰問診察せしめられたのであります。

越えて八月の十五日、一天雲無、明月晃々として、恰かも拭ふが如き中夜大師の幽懷にいたく愜はせ賜ひしと見へ、

また見んと思ひし時の秋だにも、今宵の月にねられやはすれ

と、詠ぜられた、又或る日室内に經行して、

『若於園中、若於林中、若於樹下、若於僧房、若白衣舍、若在殿堂、若山谷曠野、是中皆應起塔供養、所以者何、諸佛於此、轉於法輪、諸佛於此、般涅槃』

と、大師自ら筆を採りて、之を柱に記されました、蓋し是れは法華經の文であります、大師自ら此室を妙法蓮華經庵と題されたと申します、之れ乃ち、我大聖世尊釋迦牟尼佛が、菩提樹下に正覺を成じ、園林、樹下、僧房、俗舍、山谷、曠野、石上、溪邊に、大法輪を轉じ、跋提河畔、娑羅雙樹の間に於て、入涅槃し賜ふたるに等しいものであります、今我大師は、天童山に於て正覺を成じ、深草、鎌倉、宇治、及越の深山の、幽谷、樹下、石上、溪邊に大法輪を轉じ、京都の白衣舍に入般涅槃し賜ふ、乃ち我大師と、釋迦牟尼佛と、唯佛與佛乃能究盡、同體一體にして、二面裂破の消息であります。時に八月廿八日夜半、我大師愈々般涅槃を知しめして、沐浴し衣を整へ、偈を書しての玉はく、

五十四年。照第一天。打箇躄一跳。觸破大千。嘆、渾身無着處。活陷黃泉。

と遂に筆を投じて示寂せられたのであります。

二祖孤雲禪師と、及嗣法剃度の弟子、其他の親戚、義重覺念等の道俗皆、哀痛悲慟しました。

特に御嵯峨の上皇よりは、勅使を以て、御悼悔の思召を寄せられたのであります、それより、龕を留むること三日、大師神色生ける如く、異香馥郁として室に満ちました、既に闇維して、舍利を得ること無數であつたと傳へられてゐます。

九月六日、孤雲禪師親ら靈骨を奉じ、遺弟以下結縁の道俗を率へて、京都を發し十日永平寺に歸着し玉ひ、十二日如法に、入涅槃の儀式を執行して、恭敬供養されました。

永平寺の西北隅に塔を建て、靈骨を奉安して、其塔を承陽と云ふ、即今の承陽殿であります、大師の世壽五十有四歳、法臘四十有一歳、其入滅ましますし、御深草天皇の、建長五年八月二十八日は、太陽曆に推算しますれば、乃ち神武天皇即位紀元一千九百十三年、九月廿九日に正當するを以て今我全國の寺院檀越は、此所謂九月廿九日

を以て、正當御忌と定め、報恩會を營辨することでありすが、然し、我承陽大師の肉身は滅を示し、入般涅槃したまへしも、其法身は常在吉祥山、不離永平なることは、聖者應現の、久遠實成にましますが故に、盡未來際、不滅度に渡らせ賜ふのであります、其證據には、既に寶治三年九月十日、大衆に示してのたまへしに、

『今より盡未來際、永平老漢、恒常に人間に在りて、晝夜當山の境を離れず、國王の宣命を蒙むると雖も、亦誓て當山を出てず、其意如何、唯晝夜無間に精進修行積苦累徳せんと欲するが故なり、此の功徳を以て先づ一切衆生を度し、見佛聞法佛祖の窟裡に落在せしめて、末後永平老漢、佛樹下に坐して魔波旬を破り、大事を打開して最上覺を成せん云々』

とあります、實に七百年後の今日より追想すれば、大師斯くの如き誓願此の如き韜晦の御徳が、益々發揚して、深谷幽邃の境に於ける、蘭馨馥郁として、藏すに處なきが如く、其徳光の赫耀たることは、今更言端に述ぶるも、誠に恐懼の次第であります。如上の有様なるが故に、我大師の滅後以來、益々皇室に於かせられても、御歴代々

御歸依敬遊ばされたることは、數ふるに違まないのであります、中に就て應安の頃、御圓融天皇より、永平寺に對し、出世の道場と云ふ、御繪旨をたまはりましたのであるが、御土御門帝の、文明五年、出火の爲めに焼失致しまして、殘念ながら其文意を知ることが出来ぬのであります、其後天明八年、後奈良天皇の御代に、永平寺役僧より、右の次第を上奏致し、又皇室にあらせられても、種々御詮議の末、乃ち天文八年十月七日、全く夫れに相違ないと云ふ證據の爲めに、新たに御繪旨を給はりて、丁度前御繪旨の、證明の如きものであります、それは左の如くであります。

當寺事、日本曹洞宗第一爲るに依りて、出世の道場爲るべきの旨、應安度勅裁成さるの處、去る文明五年回録に依て、紛失せしむる由、聞食され訖ぬ、相違ある可からざるの旨、天氣候ふ所なり、依て執達如件。

天文八年十月七日

左中辨晴光

永平住持禪室

是の如くに、我大師滅後、年を追ふに隨つて、益々其の御聖徳の光明が輝いて永平

承陽大師を懐ふ

寺と皇室とが益々關係の篤くなると云ふ様なることにて、已に又天文年間より、八十年も過ぎて、永平寺の第二十一世、宗奕禪師と云ふは、中々高德の人にて、永平寺の事務上に刷新を加へ、尙且永平寺より其貫首が參内遊ばすの例を御開になりまして

後奈良天皇より、此宗奕禪師に對し、大通智光禪師と云ふ、勅號を給はりました、我大師より永平寺第二十一代までは、我大師の御辭退に依て、皇室に於ても禪師號御宣下等は、御見合せに成て居たかも知れぬが、兎に角、此宗奕禪師に至りて、再び此例を開かれた様なもので、爾來今日に至るまで、歷代天皇に於かせられても、我永平寺へ始めて昇任になれば、直に其貫主親下に、禪師號を賜はることになつて居ります故に永平寺の第五十代立透禪師には、洞宗宏振禪師と云ふ、勅號を給はりましたのであります。

之れ實に根本を言はゞ、乃ち我大師の御聖徳の光明と云はねばならぬのである、又此の宏振禪師が、小清規と云ふものを著はされ、法式の改善を圖られたる人でありましたが、其宏振禪師の上奏に依り、毎年勅願祈禱の爲め、御撫物と云ふを、宮中より

永平寺へ下し置かれ、祈禱せしむべき様、御勅旨が在て、之れも年々の例と成て居たと云ひます。

撫物と云ふは、天皇陛下の御着衣の一つで、永平寺に於て、玉體康寧の御祈禱をなして、宮中へ納め奉るのである

宮中に於て、陛下が之を御着になる例で在たと云ふことであります、之れは光格天皇の享和元年で、今日より殆んど、百十年程以前のこととありますが、其撫物の御通りには、中々其道中が隆んで在たと申すことであります、之れ畢竟我大師の御聖徳が益々顯はれたのであると云はねばなりませぬ。

そも我大師の斯る韜晦の御徳の益々顯赫たることは、年を追ふに隨て多々益々光を増すので既に大師滅後六百二年を経て、嘉永七年二月廿四日、先帝孝明天皇、特に勅書を永平寺に下し

佛性傳東國師の諡號を給つたのであります、今其國師號御宣下御勅書の寫は左の如くであります。

勅、吉祥山永平寺開基道元禪師、本出華胄、便入桑門、重瞳照室、夙表人天之師、一葦船海、遙求佛祖之道、禪慧圓淨、辭彼震且之雲、身心脫落、歸我日出之邦、觀有爲法、普濟萬物、以無礙慈、覺悟衆生、創興聖於城南、闢吉祥於北越、玄化偏覆、芳聲遠播、九重延想、萬里契誠、相門降貴、武夫鎖勇、盛哉妙機、大哉道德、爾來、瓜瓞綿綿、閱永平六百星霜、香馨芬芬、薰楓宸一脈天風、緬懷厥人、豈無徽號、宣謚佛性傳東國師、

嘉永七年二月廿四日

さて此御勅書の終りに、年月日の中の廿四の文字は正に陛下の御宸翰であります又此の御勅書に、執奏勸修寺前左小辨顯彰卿の副翰があります、之れは當時永平寺貫首勅賜大光明覺禪師、臥雲様が、國師號宣下の天恩を拜謝する爲めに參内なされたる後に投せられたるものであると申します。

執奏勸修寺前左小辨副翰

越嶺吉祥山永平寺開基道元禪師、踏道於幼中、極法於天童、謝豐莊伴猿鶴、竟

禮於邈世、綿綿道場、美品裔戚、潔哉道心、其德聲遠響於昆代、高達于天朝、降聖旨、爰賜徽號、謚佛性傳東國師、是偏祖師流德、當任至誠之所致也、加之、令上洛參内者、寔以爲桑門之紹隆師林之光輝乎、因染微意、祝毛之狀如件、

嘉永七年四月三日

前左小辨華押

永平寺明覺禪師

と是の如くでありますが、夫より又廿五年を経て、明治十二年十一月二十二日に至り明治天皇、深く大師の聖德を嘉賞せられ、

承陽大師の

徽號を下し賜ふたのであります、其御宣下の宣旨は次の如くであります。

佛性傳東國師

承陽大師

太政大臣從一位 三條實美奉

天皇

承陽大師を懷ふ

明治十二年十一月廿二日

御 璽

又太政官副達は左の如くであります

永 平 寺

今般特使を以て其宗祖

佛性傳東國師へ

大師號宣下被

仰出候事

明治十二年十一月廿二日

太 政 官

嗚呼、我大師千生萬生に皇室を擁護し、億兆を化益し玉ひ、乃至經國の大本を萬世に樹立し玉ふ、其聖德偉業は、藏さんと欲すれば愈々顯はれ、覆はんと欲すれば益益炳焉として、日月の如くに輝く、之れ則ち韜晦の御徳の然らしむる所であります。

之れに引續き、明治三十五年我大師六百五十回大遠忌に當り、四月十八日より五月八日まで、三週間大本山永平寺に於て門末の寺院、並に道俗檀信徒の、全國より參拜蟻集せる者日々に幾萬と云ふ、前古未曾有なる大法會中、則ち四月の末日に、突然宮内省より、貫主税下たりし故性海慈船禪師を御召しになりましたので、五月三日大禪師税下、取敢ず參内になりますと、宮内省よりは、我大師眞前に、御勅額を下賜されたのであります。其御宣旨は左の如くであります。

永 平 寺

勅額 承陽

右思召を以て下賜候事

明治三十五年五月三日

宮 内 省

と是の如くの副翰を添へて「承陽」の二字をば御宸翰にて、乃ち絹本縦四尺位巾二尺餘の、誠に立派なる御勅額を賜はりました。

承陽大師を懷ふ

貫主性海慈船禪師祝下は、其御勅額を奉じて、翌四日東京を御出發になるや、既に早や其事が新聞なぞに顯はれ、忽ちに東京吉祥講は云はずもかな、其他の道俗男女幾千人、停車場に歡送し、又途中各驛にありては、門末の寺院、並に檀信徒の御歡送申上るもの、其の幾百千なるを知らず、已に五月四日、越前福井に御着の時は、停車場前人の山を築き、其夜は高顯寺に御一泊、翌五日、早朝より幾千萬人、威儀堂々として列を正して、御山へと向はれ、途中各村々にては、村長村民並に各小學校生徒等を始め、道俗幾多の老若男女引きも切らず、御歡迎申上げ、殆んど福井より御山まで四里以上の路程、人を以て滿ちたのであります、愈々御山に御着になるや其翌六日最と嚴肅なる、報告式が行はれました、其報告文は左の如くであります。

御勅額報告文

維明治三十五年五月六日、嗣祖比丘性海慈船禪師悟由、敢昭告高祖佛性傳東國師承陽大師大和尚、韜光晦跡、真人守道之高風、褒德旌功、聖朝大賢之大典、願維何人能當其撰、伏惟大師始與重雲堂於洛南、天福皇帝賜額、爲禪林權輿、更開

光明藏於越北、寬元上皇賜袍爲祖山之鎮圭、加之、眞儀示寂六百載、先帝賜徽號緬懷厥人、王政復古十二年、今上加美諡優賞厥道、況今、正當迎六百五十回之忌辰、修法致祭、與數百千萬人之道俗、謝恩報德之時、乙夜曾經觀覽得入祖傳於御庫、一朝忽降恩詔、蒙賜廟額於寶塔、雲章燦然放光、山門煌乎現瑞、恂是韜晦益深褒旌愈明者、大寂定中豈不亦深感謝勅命重重哉、悟由等仰戴天心俯希眞慈、不覺涕淚之下、無堪感激之至謹告

拙僧等も何の幸ひか、千歳一遇の此報告式に參列致して居りました、性海慈船禪師が、此の報告文を御朗讀の時、實に全國より蟻集せる、幾萬の參拜者寂として聲なく皆な感泣激涙に咽ばざるものは無つたのであります、我が大師の韜晦聖德の洪大なることは、七百年を過ぎたる今日まで、年々歳々輝を増して、益々顯赫たるものがあります、已に全國末派寺院の數は、壹萬四千と稱せられ、法子法孫は貳萬を超え、檀信徒の數は壹千萬人以上であります。而かも歳々年々、新寺創立、檀信徒は増殖して居ります。嗚呼、大師は實に不世出の聖者であります。

殊に今日は南は臺灣より北は樺太、或ひは朝鮮より滿洲、海外遠く米域布哇にも曹洞宗別院が建つといふ、宗門發展の狀態であります。之れ直ちに大師聖徳の及ぶ所として吾等兒孫は歡喜に耐へないのであります。

併し乍ら時代の進運は我日本に物質文明を入れまして精神方面が年一年に荒んで参りました。悪平等惡差別に陥りましたる社會主義とか、サンチカリズムとか、過激主義とか、兎角危險な赤化運動を起すのであります。なるほど日本は日清日露日獨の大戦に勝利を得まして、ヴルサイユの會議には世界の五大強國の班に列し、華府會議には世界三大強國の實を示したのであります。此の方面から見ますと國運發展の瑞兆を見るのであります。一度精神方面に眼を轉じますと、寧ろ暗膽なる狀態であります。此の危險至極なる精神界に、佛祖正傳、直指單傳の正法眼藏涅槃妙心、即ち大師の眞精神、皮肉骨髓の在る所を知らしめ、佛教文化を宇内に廣宣擴充して、大師の祈念せられたる「皇風永扇、帝道還昌、佛日增輝、法輪常轉」するやう務めまするのが、上皇恩に酬ひ、大師の鴻徳に鳴謝するの道であると確く信する次第であります。

す。

叙上の施説は、野袴が且て著はしましたる舊本に、幾分朱正を加へ、再び下篇承濟大師を憶ふの篇と共に上梓するに至つたのであります。大師一代の御事歴及び大師文献上の價値に就ては多少の意見はありますが、今は只信仰的立場より大師を追憶し奉つたのであります。従つて幾分皮相的なるを免がれませぬ、而して筆録せる所多く、記憶の存する儘なれば、重複せる個所も在り、猶ほ追章すべき所もありまするが、其點は、承陽大師大寂定中の慈鑑を垂れ給ふと、讀者諸氏の寛宏の襟度を以て斟酌せらるゝことと信じます。要するに報恩の微衷を表し、焼香禮拜して大師の遺身舍利を供養し恭敬し奉るのであります。

下
篇
常濟大師を懐ふ

這箇是阿誰。不_レ會知_レ名。非_レ可_レ爲_レ身。非_レ可_レ爲_レ心。欲_レ慮慮絶。欲_レ言言窮。如_レ癡如_レ兀。山高海深。不_レ露_レ頂。不_レ見_レ底。不_レ對_レ緣而照。眼明三千雲外。不思量而通。宗朗三千默說。坐_ニ斷乾坤。全身獨露。沒量大人。如_ニ大死人。無_ニ一翳遮_レ眼。無_ニ一塵受_レ足。何處有_ニ塵埃。何物作_ニ遮障。清水本無_ニ表裏。虚空終無_ニ内外。玲瓏明白。自照靈然。色空未_レ分。境智何立。從來共住。歷劫無_レ名。——【坐禪用心記】

第一節 大師の出世及び修學

承陽大師の聖德を讃仰し奉り、祖恩の廣大に感泣する。衲は、茲に總持開關の祖師にして宗門擴張、宗義宣揚に不惜身命、一生を護法愛宗の精神を以て一貫されし常濟大師の宗風を窺ひ奉り、之れを大師の歸依者、曹洞宗の信者諸氏に御傳へするのを光榮に思ひます。

大師は心操の淨潔な、行持の綿密な、慈念の深大な祖師でありまして、其の佛教界に貽し給ひし功績は各宗の祖師中にも類ひ稀な御方で、承陽大師を曹洞宗の父と尊奉する吾等兒孫は、常濟大師を我宗の母として尊崇すべきであります。

大師は釋尊より五十四代目の祖師であつて、曹洞宗大本山總持寺の開祖であります。諱は紹瑾、字は壁山と號され、俗姓は瓜生氏、祖先は嵯峨源氏であつて越前多福邑の豪族の御出生であり、文永五戊辰十月八日推歩曆にしますれば同年十一月廿一日を以て呱呱の聲を擧げられました、正中二年乙丑八月御歳五十七にして寂を示されま

したが、大師入滅の後三十年を経たる正平九年甲午三月二日、後村上天皇より佛慈禪師の徽號を賜はり、其後更に四百十八年を経たる安永元年壬辰十一月廿九日、後桃園天皇、大師の徳風を追賞遊ばされ、弘徳圓明國師と諡號せられました、而して明治四十二年九月八日、畏くも明治天皇より重ねて常濟大師との諡號を御降賜になりました、明治天皇は曩には高祖大師に承陽大師と諡號遊ばされ、更に亦太祖大師に承濟大師と御諡號になりましたのは、全く仁慈の御心深く、佛法に歸依し遊ばしたる所以であつて、其の優渥なる御聖旨は、實に廣大無邊、曹洞宗の法流を汲む者の子々孫々、檀徒信徒は固より、佛教徒全體が、厚く聖旨の在る所に鑑み、王法依本の精神を把握し、完全なる國民たると共に健固なる佛教信者となり、上は陛下、及び兩祖大師の鴻恩の萬分一に奉答すべきであります。

故に太祖大師は詳しくは釋尊五十四世の法孫日本曹洞宗大本山總持寺開祖佛慈禪師弘徳圓明國師常濟大師瑩山紹瑾大和尚と申し上げてありますが、常には單に太祖大師、或ひは常濟大師又は瑩山禪師と申し上げます。

大師の御親父は、齡三十を越されたるに關はず御夫人との間には兒寶がありませんでした、之を非常に殘念がられておましたが、或朝庭前に降り立たれ薺花を觀て無常觀を起し「噫、朝の紅顏も夕には白骨となる、資財を蓄め珍寶を蒐むるも實に夢幻泡影に異ならぬ。殊に余は子も無ければ、一朝無常の殺鬼來る時は朝露の如く人生を終り、歿後誰あつてか吾等の菩提を弔ひ追善を爲すものぞ。然らば吾も亦薺花の儚なきに異ならぬ」と嘆かれたのであります。之を聞かれた夫人は此の夫の無常觀に痛く感激せられ、毎日多禰の觀音菩薩に祈誓を籠め、觀音普門品を讀誦すること三十三返禮拜を行ふこと三十三拜、敢て一日も懈怠さるゝなく「若し女人有て、設ひ男を求めんと欲して、觀世音菩薩を禮拜供養せば便ち福徳智慧の男を生ん、と觀音經にありますが、願くは菩薩の威神力を以て一子を授け給へ」と一心に念じました。その願力の佛菩薩に感應してか、或る夜菩薩の靈夢に感じて妊娠し、月滿ち期至れる陰曆十月八日紫雲屋上を掩ひ香氣室内に溢れ、祥瑞奇瑞あるの日、丰姿秀拔、面貌端正なる大師は御誕生になりました、父母の喜びは更なり、隣里郷黨一人として大師の誕

生を祝はぬはなかつたのであります。

熱烈なる信仰、敬虔なる菩提心、深厚なる愛の結晶として降誕されし大師は、幼にして常童と異なり、襦袢の間より合掌しては『南無南無』と稱名し、坐つては三寶禮拜の姿勢を取り、遊戯には石を積て佛塔に模し、土を圍めては菩薩の尊像を型り、稍長じては慈母と共に佛前に稽して觀音經を讀誦し、佛事を唯一無上の樂しみとする風がありました。

大師は年六歳の時、慈母に従ふて、觀音大士に詣て、相好端麗悲顔微妙なるを瞻仰し、中心深く憐び、突如慈母に問ふて曰く『菩薩は人なるや人に非ざるや、又た如何なる善根功德の力に據てか衆生に共敬禮拜せらるゝや、而して何處に住して化導救世したまふや』と。此の問ひは未だ搖籃に在り乳臭未だとれざる兒童にあるまじき問ひであつて、流石に佛敎篤信の善女たりし母君も一旦は驚ろき、一旦は怪訝り、一旦は喜んで、扱て徐ろに諭さるゝやう『貴子の問ふ所は思議し難く商量し難き問話である妾も未だ其理を究めずと雖も、大士は三十三身に身を現じて、人間の機根に隨つて垂

手せられ、慈眼を以て衆生を視そなはし福壽然量なりと聞く、此の故に吾等衆生は只管菩薩の大願に歸命するのである。さすれば必ず菩薩廣大の光明に攝取せられ火宅を出離し穢土を解脱するのである』と。此の懇々たる訓話によつて大師は出家求法の志の端を發したのであります。

大師は生れ乍らにして、古來の大善知識と同じく神秘的な奇特の行爲があつたのであります。書を習ひ文を學び本を講ずるに至り、俊才英敏の譽れ郷土に隠れなく、見聞覺知する所神童の名を擅まゝにし、博覽強記儕輩を抜き、經史百家の書を忽ちにして通曉せられました。特に俗書俗典は之を斥けられ甚深微妙にして含蓄深き大乘經典に親しまれました。大師の讀書力の増すに従つて、三寶尊重の念と金剛的なる信仰と、眞理への憧憬と出家得脱の念とが日一日と加はつて來たのであります。然し父母恩愛の絆は出家を許さなかつた、之は人情として當然と云はねばなりません。而立を過ぎてから出來たつた一人の息子に對する情緒の纏綿なる察するに餘りあるのであります。併し乍ら大師出家の悃願切訴は三日間の斷食をするに至り、其の至誠は天

地神明を動かす、近親戚族を感嘆せしめ、父母も亦到底、此志は屈することは可能ぬと觀念し、殊に此兒は觀音の託兒である故五濁の俗世に置いてはならぬと相談し、當時道譽江湖に竝なかつた永平寺孤雲懷昇禪師の膝下に拜して、其の性行と所好の念願を話し、初めて染衣の沙彌となり大師は出家の大目的を達せられたのであります、時に建治元年乙亥四月八日丁度釋尊降誕の日でありますのは不可思議なる因縁であります。是れ大師八歳の春であつて御宇多天皇の御宇であります。

懷昇禪師の寮に侍すること六年、日夜參叩問法、質疑所問を怠たらず、佛典祖錄に親しみ行業日に増し月に進み、弘安三年即ち十三歳の年二月十八日大戒を受けて僧衆の班に列せられました。大師の鐵石の如き修業力と、赤熱の如き求道心と、之に伴ふの勇猛精進力は、遂に師懷昇禪師をして「此兒は後生であるが大人の所作がある、他日人天の大導師となり大いに我宗門を振興せしむる」と讚嘆さるゝに至り、禪師の愛寵と提撕も懇切を極めたのであります。不幸此年懷昇禪師は疾に罹られた。大師大いに之を憂へ湯藥を盛り、按摩を取るなど看病に對する意至り情盡さざるはなかつた

禪師は「老病此度の病氣は老病であつて死の近きを知る、憾むらくは此子を撫育して生涯を見る事が出来ぬ」と云はれた程將來を囑望せられたのであります、而して大師に命じて徹通義介禪師に付かした。當時越前寶慶寺に在つた寂圓和尚の化門が熾んで天下の雲兄水弟は錫を和尚あ坐下に掛けるを誇とした。大師も亦弘安八年正月廿八日訪法尋師、行雲流水の旅の最初に當つて和尚を訪ね一夏を過し、京都に上つて寶壽寺の寶覺、白雲寺の慧曉等いふ教界の長老を歴問し、更に教相の學に達せんと思立たれ叡山に登り天台學の蘊奥を極め一切藏經を閲覽遊ばされて、學業全く成つたのであります。熾烈なる、大師の願望は紀伊興國寺に法燈禪師在つて德譽一世に高かきを聞かれ、弘安九年丙戌の秋、遙々其門に參じて機根の大なるを識得せられ、「非凡の大器」であるとの折紙を付けられたのであります。斯くして大師は南船北馬天下の宗匠知識を訪ね、東湧西沒師家禪將の門を叩きました。未だ自惚根性や傲慢不遜の態度を現はさず、飽迄眞摯に道の爲、法を究め師を求めて倦む所を知らなかつたのであります。正應元年戊子の秋再び越前に歸り寶慶寺に寂圓和尚を拜し、次で永平寺に

歸山し義介禪師に参じました。翌正應二年己丑の春師義介禪師に隨侍して永平の深山を下りまして加賀の國大乘寺に移つたのであります。

第二節 大事了得

茲に申上ぐるは禪門に最も重ぜらるゝは、大事を悟るにある事であり、眞理を究め、生死を透脱し、佛々祖々と證契即通し、師資此法を嫡々相承して斷絶せしめず一器の水を一器に移すが如く、正師と嫡嗣とが顔々相對して中に影像なきに至るのが禪門修行の最大要訣であります。之れを具體的にしますと大法の付囑となり、之れを精神的に見ますと大悟徹底して、自由自在圓融無礙となるのであつて、承陽大師はこゝを「水鳥の行くも歸るも跡たへてされども道は忘れざりけり」と詠せられました。永平承陽大師は笹の如き舟にて遙かに宋土に入り參師問法の結果、天童山の如淨禪師を得て「身心脱落、脱落身心」と大事を了得せられ、御歸國になられての最初の獅子吼は「空手還郷」に在つたのであります。而して承陽大師の法を孤雲懷昇禪師が御嗣に

なり、懷昇禪師の法は徹通義介禪師に傳へられました。此の義介禪師は寔に稀有なる修業猛烈、機鋒峻銳の方で、行持の健實なること、永平寺衆多しと雖も其の右に出づる人はなかつたのであります。其の行持の一斑を窺ふに、寛元元年僅かに二十四歳にして、永平寺の典座（といつて大衆の食事を管掌する六役寮の中で一番重任なる役）に任せられ、冬積雪丈を埋むる中を八町の長坂曲坂を飲櫃汁桶菜器を運んで大衆の爲二事の粥飯と藥石を供養された。二十九の壯年を以てして監寺とて、一山の監督たる地位に上つた事に見ても、如何に鐵石頑心、行業實頭、參學工夫に慕直された方なりしかを想像するに足るのであります。しかし義介禪師の大乗寺を開堂せらるる以前は、既に永平寺を退院されて養母堂を建て、老母に孝養を盡して居られたのであります。即ち三大尊行狀記に

文永九年壬申二月退院建養母堂養母恰如陸州陳尊宿、

とあるに見ても明かであり、而して正應二年は夫より十八年目に當ります。大乘寺開創由緒書には

當寺は本と教寺たり、富樫家尙開基す、而して後正應二年主僧澄海密師、家尙を勸めて徹通和尚を請じて推して開山第一祖と爲し教を革め禪と爲す

とあつて、此年の春義介禪師が永年住み慣れし永平の祖山を下り加賀大乘寺に喬遷せられたのである。大師會々法華經を看讀して法師功德品の中に「父母所生眼悉見三千界」とある所に至つて省悟一番忽ち方丈に至り所解を呈露したのであるが、禪師「自己の一大事を究むるに些々の覺觸あつてはならぬ、汝ち去つて更に工夫を做せ」と一喝された。大師退いて寢食共に忘れて朝參暮請親しく禪師の爐鞴に入り訓誨垂示を體する傍ら一切藏經を看讀し盡して永仁元年甲午十月二十日開堂式を舉行し禪師上堂に際し、趙州從諗禪師の「平常心是道」の話を舉示せらるゝや、禪師ははたと手を拍ち、「我れ會せり」と猛然として起つたのである。禪師曰く「爾什麼と會すや」と。大師對へて曰く「黒漆の崑崙夜裡に奔る」禪師曰く「未在更に一句を道へ」大師曰く「茶に逢ふては茶を喫し飯に逢ふては飯を喫す」此問答によつて機縁全く熟し、因縁修證の開發を見たのであります。義介禪師即ち大師に印可證明を與へて曰く「爾ち向後當に洞上の宗

風を起すべし」と囑望され、明る永仁三年乙未正月十四日義介禪師大師に命じて入室せしめ、袈裟傳衣及び佛祖嫡傳の法を相傳し、茲に於て大師は一箇の瑩山でも紹瑾でもなく實に佛祖の生命を護任し保證し、曹洞の宗風を中外に顯彰し、坐禪の功德を氷遠に弘擴し、發展せしむる重責ある瑩山紹瑾禪師と成られたのであります。

前述のうち、義介禪師と大師との問答に、黒漆の崑崙夜裡に走るといふ句があります。之れは自分の没蹤跡なる様子を形容した句であつて類似の句に黒漆の崑崙雲外に走るとも、崑崙靴を着けて空中に走るなどがあります、皆無作の妙用を喩へたもので崑崙とは支那の崑崙山を云ふのであります。鷺鷥雪に立つも同色に非ずて、鷺鷥は白色の鳥であるが雪の白さと同じではありません。それと同じく黒漆の崑崙山上を眞闇に通つても、佛か祖か魔か鬼神か分別が出来ぬのであります。即ち大師は宇宙の眞理は齊しく萬物に宿つてゐるといふ意味を省悟したので、斯く答へられたのであるが、禪師より更に「未在底を云へ」と問ひ掛けられて「御茶に逢つたら茶を呑み御飯に逢つたら御飯を喫せせう」と答へたのであります、之れ本分底の活消息であつて、悟

者と寐寤者と類して齊しからざる所以であります。禪師は大師の見識人格が宗門を振興するに充分である事を看破されましたから、法を大師に傳へて門風の擧揚を依頼されたものであります。

第三節 綿密なる行持

大師が大乘寺に在て、師義介禪師の法益を補佐してゐる間にも、桃李語はず下自ら蹊を爲すの道理に洩れず、梅檀の如く香しき道譽は遠近に敷き、遐かに風を望んで錫を掛けんことを請ふ者數を知れずでありました。特に細川刑部大輔頼春の屬將たる阿波國海部の郡司某は加州富樫家(大乘寺の開基)の族縁であつたが、大師の道風を傳え聞き傾慕瞻仰措く能はず、永仁四年丙申の秋、阿波に城滿寺を建立して大師を屈請して其の開山第一祖となし法化を希つた、翌永仁五年錫を九州に掛け宗乘を鼓吹し、豫て肥後の大慈寺には寒巖義尹禪師、即ち後鳥羽上皇の皇子であつて、高祖の嫡嗣であり祖師分上の大徳として四衆の讚仰厚き宗將あるを知つてゐた大師は、早速大慈に義

尹禪師を拜して玄談の妙理を交歡されたのであります。時に義尹禪師門下には斯道紹由、鐵山志安の俊才在り有道の高士として崇敬せられてゐた。此の二大老漢が大師に或日法要を問ふたのであります、大師言下に答へて曰く、

「釋迦老師一大事因縁の爲に世に出現し、直に一切衆生をして佛智見を開示悟入せしめたまふ。且く道へ這箇の一大事、作麼生か會せん、門より入る者は家珍に非ず、直に須く自家の口を開き自家の話を説くべし。若し未だ爾らざれば縱令五千四百八卷を説き得て七縱八横なるも只だ是れ法身量邊の事なるのみ、是の大事に是て遠ふして遠し、所以に人々只行住坐臥の處に在つて一絲毫を添ふるとも也た得ず一絲毫を減する事も也た得ず、會し去らば更らに些子の氣力を費さず、纔かに奇抜玄妙の商量をなさば已に沒交渉言ふことを見ずや、動は即ち生死の本、靜は即ち昏沈の郷、動靜雙へ忘するも佛性を瀬預す。不恁麼なるも畢竟如何、もし是れ旨外に宗を明むれば終に言中に則を取らず。」

と。其の理路整然、心事皎潔、識見高邁なるに、紹由、志安の二長老も忽所に所知

を忘じ疑雲斷截、月の雲岫を出づる思ひあつたこの事でありませう。後年總持の二祖となられた峩山紹碩禪師は、永年叡山に在つて佛教學を専攻し、天台の奥義を究めて、優に一方の宗匠たるの資格はあつたのであるが、猶心事の問題、生命の問題には滯る所あり、従つて煩惱の情霧時に絶ち難きものがあつたのであります。大師の名一世に高きを耳にし歡喜踴躍して遙々九州城滿寺に來り、大師に謁して機々相投する所あり、即時に弟子の禮を取るに至りました。以外可鐵鏡西堂、孤峰覺明、恭翁運良等得度せる者、城滿寺中に於て既に七十五人に達しました。其の化益の廣大と、其の慈徳の深厚なる、唯々驚くばかりであります。

正安元年己亥大師三十二歳の冬、義介禪師書翰を裁して大師を召し給ふにより、大師は本師の侍側に還り、師業を補翼し、大衆を接化し啓發し垂誠し説法して、大乘の門風を張つたのであります。大師著作中の大部を爲す傳光錄五十三則は、實に正安二年庚子正月十二日よりの開講にかゝり、其の内容は後段に詳述すべきも佛祖の命脈であり不傳の妙味である、嗣承相續の様子を拈提せられたのであつて、言々句句光

あり力ある名文であります。大乘開基たる富樫家尙又た深く大師に歸依し、常に説法を請ひ、菩提心を發し財を投じて地方公益の爲め盡す所多かつたのであります。之れ直接には大法宣揚の外護者となり、間接には國家公益を量るの善行者となつたのであります。越えて三十五歲乾元元年壬寅義介禪師老齡の故を以て限院閑居と爲り、大師は正式に法席を繼ぎ大乘第二世となり、僧堂の規矩、大衆の氣風、叢林の準繩甚だ備はり、道俗の歸嚮倍々盛んに、加賀大乘寺の存在は日本に重きを置かるゝに至り、後に永光二世となりし明峰素哲、無涯智洪の諸禪師も來り投じ、受戒得法の者踵を繼いで出て、大師は此間に於て坐禪用心記、三根坐禪説を普説されたのであります。

應長元年辛亥の歲、加賀法苑山淨住寺に住してゐた可鐵鏡西堂は淨住寺を大師に譲り隱退しました。大師は此の懇請を容れ、大乘寺は恭翁運良に繼がしめ淨住の精舎に入り、開山第一世と成り化門を新設されたのである。恭翁運良は可鐵鏡西堂や孤峰覺明と共に大師の九州城滿寺時代に參叩せられた方であるが、系統は臨濟宗に屬し、法は由良の法燈禪師に嗣いだ羽州の人であります。曆應四年八月十二日七十五歲

の長壽を以て示寂し、後年、後小松帝より佛林慧日禪師の諡號を下賜された大徳でありまゝ、併し當時日本に興隆されたる禪の二派即ち曹洞と臨濟は未だ確然たる區分を施こされず、人格本位で道譽の勝れた宗師家があれば、系統の如何を論ぜず、進んで參學得道せられたものと窺ふことが出来るのであります。大師が淨住寺に轉董された翌年は正和元年壬子の年であつて、能登の國滋野信直が其の夫人平氏と共に大師を能州酒井保の永光寺に屈請したのであります、其狀には

我等此山を施す志は、唯和尚一時の居住を望むのみ、成壞興廢を念はず、今より以後縦ひ貧士丐人に與へらるゝも我是を顧みず、一度和尚に施せし後復た管領することなし、永く捨心を發し了れり、何ぞ重て希望あらん。

とあるに見ると、其の喜捨寄進の志が、誠に直卒であつて徹底した人格信仰に基いてゐるのであります。永光寺は詳しくは洞谷山五老峰永光護國禪寺と云つて、大師臨終の地でありまゝ。開基滋野信直は海野三郎との冒稱があつて、能州中河の地頭酒匂八郎頼親の女平氏の夫て此の夫妻は揃つて大師を尊信し、夫の法號は妙淨、妻の法

號は默譜祖忍大師と申します。然して永光寺を何故五老峰と命づけたかと云ふに、日本全國中只此寺のみが天童如淨禪師を第一祖とし、永平道元禪師を第二祖に、第三祖孤雲懷辨、第四祖徹通義价、第五祖瑩山紹瑾との五祖の祖廟が築かれてゐるからであります。此の地は奇巖怪石峙ち、清水境内を廻繞し草木鬱蒼たる地であつて、頗る大師の素懷に適ひ、淨住寺は侍者無涯和尚を監寺とし、大師は此地に庵居して大乘の佛事を拈提してゐられたのであります。大師の永光寺盡未來際文には、

洞谷山は平氏酒匂八郎頼親の嫡女法名祖忍清淨寄進の淨處なり故に紹瑾一生偃息の安樂地と爲す、來際瑩山遺身安置の塔所と爲す(中略)山僧が遺跡諸山の内崇重すべき遺跡也、嗣法の入住持興行すべし縦ひ嗣法の人斷絶すと雖も門徒の小師中評定和平して須く住持興隆すべし。

とあるのは、寺門の浮沈興隆を度外し専ら大師の個性が明かに表出された置文であつて、之れ永光寺が宗門に特殊的地位を持つ所以であります。又た嗣法人を尊重すると共に門徒を尊重し評定和平を旨とせられし點は、之れ明かに曹洞宗の民衆化したる

先軀と見得るのであります。後年富樫家方が此の清涼地に伽藍を造營して漸く寺院の體を具へたのである、工事中に閹伐維弗多羅尊者が來應現化され法材を運び法器を與へ法益を資けられたので近郷の者皆隨喜讚歎したと傳へられてゐます。伽藍が落成して祝國開堂が舉行されましたより、大師の道風を望む四來の龍象が麤至蝟集し、永光の叢林は、大乘寺、淨住寺、等と共に法鼓甚だ振ひ、壺庵至簡、珍山源照の如き俊才逸足が歸嚮したのであります。正和三年甲寅の歲能登羽咋の郡司得田氏が寶達郷に一寺を建立し大師を請じて開山とし光孝寺と命けました。大師は其頃永光寺、淨住寺、光孝寺の三寺を巡錫して接衆化導大いに勉められた爲めに、門風興り天下の禪風は北國の隅陬に奪はれたかの觀があつたのであります。北國は唯今も餘り便利な所ではありませぬ、況んや六百五十年の昔は道路も交通も普通ならぬ險阻な不便なものであつたのであります。而して永光寺から淨住寺までは大凡四十里もあるかと思ひます。此の遠距離を常に一杖一笠一袈裟で往復なさつた祖師の布教傳道興法隆禪の心中を察する時、私共が暖衣飽食汽車汽船の便に身を託し安逸なる生活を爲し乍ら、猶ほ祖師

の行狀の萬分一にも報恩の徳を修めてゐないのを内省自觀して、甚だ慚愧に堪えぬのであります。

曹洞宗は温密の家風を以て特色の著しきものと致します、其内でも太祖常濟大師の門風は理論は直截簡明所謂「平常心是れ道」であり、「黒漆の崑崙夜裏に走る」ものであり「至道無難唯嫌揀擇」であり、更につきつめて云ふと「無」の一字にあつて、言語手段を超越したものであります。故に拂拳棒喝の手段も亦は一箇の開手段と見られるのであります。僅かに文字語言に墮すれば第二第三であります。併し乍ら枯木寒巖により三冬暖氣なしなどいふ生命のないものではなくして、實踐躬行を重んじ、時に鉢を持つ手に草もとれば畑も耕しませう。時に聖經を執る手に庖丁を握つて料理を致すことも決して珍らしくはありませぬ。斯くの如く理性一方、學問一方、超越一方に走らず、着實に自己の生命を充實させて、暫時も在らざれば死人に如同す、即ち生命を閑却したなら存在せぬも同様であると苛責し自警して、一日の生命を等閑にせず費さゝらんと行持して行くのが曹洞宗の、教相の諸家に勝る所以であり、易行易解の

諸宗よりも現實味の多い所以であり、曹洞土民として温健綿密の家風を保任し、民衆と共に佛法を擇び禪の妙味を發揮して行く所以なのであります。

第四節 總持の開闢

太祖大師の遺身舍利は總持寺に在る、高祖大師が日本國土に曹洞宗なる種子を下ろしたものとすれば、太祖大師は其の種子を撫育し培養して、曹洞宗の根幹を大ならしめ枝葉を繁茂せしめられたのであります。前述の如く大師は或時は九州の諸國に法輪を轉じ、或時は北國の端より端を巡錫して佛日を輝かし、法燈を高く擎げ、法旆を長く靡かし、寶積の國土と、極妙の淨地を建設して、四來の縑素を接得して倦む所を知らず、其の徳風は天下に遍なく、殊に永光時代は大師の思想も圓熟し道價將に冲天の勢があつた時代であります。されば他宗他門の士と雖も大師の道譽を欣慕して來り投じ衣を革めて入門する者も甚だ多かつたのであります。總持寺は素と眞言宗の律院であつて當時定賢律師が院主でありました。總持寺の所在地は能州鳳至郡櫛比莊であつ

て其頃は諸嶽寺と申し、随分永い歴史を持ち本尊は觀音大士であつて行基菩薩の御作であります。元享元年辛酉四月十八日の夜定賢律師の夢に觀音大士應現せられ娑婆世界の教主釋迦牟尼世尊第五十四世の善知識今當國酒井の洞谷山に出生して大に法輪を轉せらる、實に靈山の一會儼然として未だ散せざるものなり、汝ち速に此寺を以て彼の聖者に譲り永く佛法紹隆の道場たらしめよ。

此の夢は痛く律師の胸を衝激したのであります。此の神秘なる不可思議力が瑞夢として太祖大師の跣睡中にも現はれたのであります。其の大悲慈愍の光と和雅柔輦の顔は如何ばかり崇高く端嚴なものでありましたか。觀音菩薩は「我れ一基の寺を師に與へん」と云はれ、大師を誘引して或山門に來たのである、此時大衆數百人威儀を正して迎へてゐるのを見て「總持一門八字に打開す」と大師は法語を唱へられて境内を巡覽遊ばさるゝに、二層の樓門があり、樓上には錦装した大般若經六百軸の金文を備へ、正面に放光菩薩の尊像を安置してあり、其他佛閣僧房が巍峩として屹立してゐる奇夢を感ぜられたのであります。斯くて大師を拜請せんとして出發した定賢律師と、櫛比

莊に發錫されたる大師とは偶然にも中途に相逢ふて互に瑞夢の符合を歡び、律師は直ちに歸山して大小の檀越に此旨を謀り寺門を擧げて大師に献じ、瞻仰崇拜の誠意を披瀝したのであります。

茲に於て諸嶽寺の諸嶽を山號とし瑞夢中の法語總持の二字をとつて寺號とし、五百年來の律院は全く規模を改めて禪院となりました。入院晋山の式は同年六月八日に舉行され、後年常在の大衆常に二百を下らず、天下の一大叢林として、一萬三千の寺院の大本山となるの基礎は茲に立派に竣成されたのであります。定賢律師の寄進せる境地寺領は、東は火の尾、南は厨谷の向谷、西は長峰、北は荒志の横道を限界とする、四至分限の境地であつて、鶴山龜山等の山影清く、清泉湧き、淨水漾ふの地であつて此處に佛輪を轉じ、此處に法輪を輾じ、大乘佛教の紹隆を期し給へる太祖大師の遺身舍利は、その山の色にも其の谿の響にも宿つてゐることを看取せねばなりません。今は總持寺は故石川素童禪師の、畢生の努力と超世の悲願によつて、能奥の山間僻地より京濱の中間鶴見の高臺に移され、大本山總持寺の名は、單に國內的なるのみならず、廣く世界に紹介され、従つて禪も普遍化されて民衆の上に強大なる根柢を張つてゐるのであつて、能登の本山は特殊なる意味に於ける本山別院として太祖の祖廟を祀つてあります。能登の本山を何故に鶴見に移すに至つたかは餘りに其原因が明かであつて賑々を費す必要はありませんが、直接の原因は明治三十一年四月十三日祝融の災に遇ひたる爲めであり、間接にて禪宗を世界的に宣傳し佛法の總府たる本領を發揮するには能奥の如き、北方に僻せる然して不便極る土地に在つては、如何に高德あり大徳在すも其の徳化を擴大して行けぬ、時代の宗教は須らく時代を制し時代を制するには適宜なる土地を選定するの要があつた、斯る時代の要求に應じて總持寺は移轉されたのであります。總持開闢の時代、即ち宗門擴張、宗義宣傳の時代には、唯惟れ大師の熱勢を以て龍象を提擡し、宗門の基礎を確固にする外なかつたのであります。併し乍ら徳孤ならず必ず隣ありで、大師の徳風は近國に鳴り、遂には高く京都の大極殿九重の奥深くに在します後醍醐天皇の叡聞に達し、此歳の秋三光國濟國師孤峰覺明和尚を勅使として彼の有名なる十種の勅問を垂れ給ふたのであります。大師の御奏答

は一々理路明白、答意整然として然かも含蓄の深いものでありました。陛下の叙感斜ならず直ちに紫衣を賜り總持寺と大書せる勅額を贈られ、特に一宗の僧綱大官寺と爲し給ふたのであります。

翌元亨二年壬戌の歲、陛下は大師を特請して佛祖正傳の菩薩戒を授かり、其秋八月廿八日給旨を下し給ふた。

後醍醐天皇給旨

能州諸嶽山總持禪寺者直續曹溪之正脈、專振洞上之玄風、特依爲日域無雙之禪苑、補任曹洞出世之道場、宜相並南禪第一上刹、着紫衣法服奉祈寶祚長久者天氣如此仍執達如件、

元亨二年八月廿八日

經 顯

瑩山紹瑾和尚禪室

とあります。此の給旨に仍つて、總持寺は日今曹洞宗の本山賜紫出世の道場として一宗の規格嚴然として備はり、曹洞宗と公稱するの濫觴となつたのであります。翌元

亨三年癸亥、大師は叙慮に依て總持寺を一宗の本山とし、鎮護國家の道場として専ら化儀を此地に開發したまひしを以て、親ら淨住、光孝の二寺を巡化することが可能ぬそこで無涯禪師に命じて淨住寺の席を譲り、壺庵禪師をして光孝寺を繼がしめ大師は専ら總持と永光の間に在つて化益に盡されたのであります。猶ほ、天皇の准后たる藤原氏が懐胎されたのであるが、産期が迫つたるにかゝはらず身體不調の兆候ありたるため、特に總持寺の放光菩薩に祈念したまふに翌年王子が安らかに誕生されて宮中は普ならぬ歡喜に湧き返つたのであります。従つて宮廷の信仰も彌増して、大師の道風は遙かに國內に張り、上下貴賤の間に總持の名と共に瑩山禪師の聲名も高まつたのであります。否瑩山禪師がありましたから、總持の門風が盛んになつたのであります。

第五節 大師の遺志と其の著述（上）

高祖承陽大師が宇治の興聖寺を出て、越の深山に入り猿猴を友とし、飛禽を伴侶として、高潔無比なる生涯を送られた、而して其間世情凡情を離れ、名利の巷説を遠

ざけ、清風明月を拂ふの勝境に逍遙せられました、之れは本師如淨禪師の遺囑と、一つは鎌倉時代の氣風が公家萬能の時代より侍即ち武家の手裏へ政權が移つたるに拘はず、往々武家は争亂鎮定に名を藉り、上に至尊あるを忘れ、國に宗教の大切なるを失念し勝ちであり、亦宗教家と稱する人達も侍の手先となり山法師となつて衣の上に鎧を付け、軍旗に佛名を彫るなど俗事俗行が多く、眞個の佛教が地を拂つてゐた佛教を治國の大本とし、禪を佛教の總府とし、絶對聖道の道を慕直に進まれる承陽大師は、此故に法幢を建て、禪刹を拓かれたのである、現代も其通りであります、鎌倉時代にも人物が居なかつた、教相判釋に捉へられたる天台僧侶、事々無礙法界、理事無礙法界を説き阿字本不性を説く眞言密教の勢力は漸く衰へましたもの、新たに發りましたる法然上人の淨土宗、一遍上人の念佛宗、親鸞上人の眞宗の如き諸宗は蘭菊の美を競ふて戰爭に倦み疲れた戰國を歴し武人の間へ流れ込んだのであります。而して或者は興禪護國を唱へ、或者は王法依本を標榜し、或者は立正安國を唱導したのであります。故に當時の宗教には、共通せるいら／＼しさがありません。従つて民衆

は落着がなく、一國の城主、一軍の將たりとも、誠に儚ない萍の如き生活を送り、婦女子弟は常に不安な、脅威に満ちたる日を迎へて居りました。夕には平氏の客を迎へ朝には源氏の客を送る、政變幾回、敵も味方も哀れなる歴史に轉して、厭世悲觀の聲に自ら戰慄してゐたのであります。所謂の他力往生とは此の悲觀思想に油を注いだものであります。亦徒らに帝國主義を唱へて強がる者も腹は浮々してゐたのであります。此の浮々した、落着のない、安價な悲觀思想の瀰漫してゐる民衆は、誠に餓えたる貧者と同様であります、此の貧者に藥を投じ飯食を與へて不安を一掃し、頗る超越的立場を取らしめんとしたのが我が承陽大師でありました。斯く見まする時に高祖が寧ろ文化の中心地より遠ざかり、北國の山間に入られましたる消息を窺ふことが可能事と思ひます。併し乍ら其爲に高祖の御精神、高祖の國家觀には少しも動搖を來すが如きことはありませんでした。

我が太祖常濟大師を憶ふ時に先づ高祖を憶ひ、高祖を憶ふ時に必ず太祖を偲ぶのであります。夫は時間に於ては兩祖の間には約六十年の相違が御座います。而して祖師

位から申しますと、高祖道元禪師、二祖孤雲禪師、三祖徹通禪師、太神瑩山禪師とな
 るのであります、即ち太祖は高祖より四代の孫であります、然も時代は源家より北條
 家に移り、北條の勢力亦た漸く傾き、歴朝は土御門帝より、順徳、仲恭、後堀河の諸
 皇帝を歴まして、後伏見、後二條、花園、後醍醐帝に至り、足利尊氏出で、楠公出で
 新田氏出で、忠臣孝子輩出し、名將奇將勇將も出でました代り、亂臣賊子も勢を
 逞ふしたのであります。確かに時代は移りました、確かに人物は替りました。併し
 乍ら、其の時代其の人物の奥底を流るゝ思想は此間を一貫してゐたのであります。茲
 に至つて高祖の遺志は太祖の意思の根柢となり、太祖の意志は高祖の意志の繼體と見
 ることが出来るのであります、殊に高祖が深草を出で、宇治を退き、遂に永平寺に入
 られました如く、太祖は阿州の城満寺より、加賀の大乗寺に移り、大乗寺より淨住を
 經て、能登の永光寺に入り、更に轉じて總持寺を董さるゝに至りし道程も椽を一にし
 てゐるのであります。承陽大師が京都より越前へ、常濟大師は加賀より能登の奥へ、
 いづれも繁華な地より邊鄙な地方へ入れられ、名聞利用を土芥の如く顧られぬ淨潔高

崇なる生活にて、禪を打し、恰かも其の境涯は、入つては幽玄の底に徹し、出で、は
 三昧の門に遊ぶ底の、無爲恬淡さでありましたが、徳光輝々として日月の如く、道聲
 殷々として天籟の如く、永平の溪谷、總持の閑地に求道の客が今日も、明日もと詰め
 かけ、天子も將軍も此門に入り、農民も商夫も此の園を踏むといふ有様でありました
 のは、是れ全く兩祖偉徳の廣大なるの致す所でありました。扱て然らば高祖大師が國家
 觀は如何といふに、皇道還かに昌んにして佛日の輝きを増すに在つたのであります、
 而して太祖大師の國家觀も亦之れに異ならなかつたのであります。即ち總持寺の龜鑑
 十條を定め給ふた其の第一條に「嗣法の門人は盡未來際、寶祚長久を祈り奉るべし」
 とありまして、爾來總持寺の法要は、尊王護國を行事の主腦と定めて、今日に至るも
 些かも此の主義に變りはないのであります。何も軍國主義とか帝國主義とかいふ難か
 しい理窟でなく、我等人間として生れついた者は國家的生活を爲すべく先天的に出來
 上つてゐます、一心、一家、一國、一社會と種々區別を致しまするが、要するに大な
 る社會と雖も、其基礎は一身に置き、一身は亦心を修めて始めて完全なる人間と成り

得るのでありますから、畢竟此の人間の集つて組織した社會は此の人間によつて平和ともなり不安ともなるのであります。故に坐禪をする目的は自己之れ宇宙となり天地同根萬物一體となり、有情非情同時成道となり、草木國土悉皆成佛となるにあります。斯くなる時に一家が齊ります、一國の施政が圓滿に運びます、一社會が平和になります。大師が人心の不安定なるを痛く惜まれ、自ら坐禪を修し坐禪の功德を傳道せらるゝと共に、國家の寶祚長久を祈られたのは、深き思召によるものとして法孫の省慮を望む次第であります。大師の選述されし傳光録に

汝諸人悉く皆な國土にはらまる、一天下國土上悉く是れ國王の水土にあらすと
いふことなし、然るに家にあれば親につかへ、國に侍れば君につかふまつる、如是なる時天地加護ありて自ら陰陽のめぐみをうく。

とあります、吾等が生存する此の大地は國家の大地である、如何なる者も大地なくして生れた者はない、吾等は悉く國家の土に孕まれたる子供である、されば親に孝養を盡すも君に忠勤を擢んずるも皆自然の道である、天地はかゝる人を加護し、運命

は如斯人に幸運を授くる者であると仰せられたのであります。而して、大師はかく信じかく實行遊ばされた、其の本師たる徹通義介禪師は大乗精舍に在つて久しく接衆せられてゐたのであるが、老衰して衆を提擧するに辛勞を覺え給ふの風聞を耳にせらるゝや、大師は具さに苦を經、酸を嘗めて開拓したる阿州城滿寺の法筵を資に譲り急遽歸省して本師の教化を輔けられたのであります、傳道者にとつて其の傳道區域を捨てるのは非常につらいことである、然るに大師は本師の勞苦と老衰とを聞くや遽々然として歸省し、師に代つて大衆を提綱する傍ら、本師の爲め、湯藥を盛り、甘旨を供養せられた、其の師を懐ふの志の厚きは、如何なる忠僕、如何なる孝子にも譲らぬのであります。吾等の大師に學ぶべきは、非凡人である。大悟者である。大人格者であるといふ以外に、普通の人間として見ても猶は完全な、模範的な、稀有の大徳であり、没量の大人であるといふことであります。其の生母を失はるゝや、洞谷山永光寺山中に在る華蓮峰に慈母の守護佛でありましたる觀音菩薩の尊像を安置し、朝夕の參拜を缺かさなかつた、之れ美はしき人情の發露であり、人間至誠の現成であります

す。而して大師は尼僧祖忍なる者を薄蓮峰の庵に置き常に淨花を備へ香を手向け讀經をなさしめて、其狀恰かも生母に事ふるが如くでありました。されば大師の意志とは大師の温密の家風、實着なる行藏、即ち大師の運作轉歩の間に閃いてゐるのであります、大師一生の生涯は悉くその健實なる意志の表現であります、故に大師の一生は寔とに、後世に垂れ給へる師範であります。

大師五十七歳の御年（元亨四年甲子）親ら十條の龜鎮を制定して總持寺末代の遵式とし、總持寺を峩山紹碩禪師に繼がしめ、大師は酒井莊永光寺に退隱せられた。翌正中二年乙丑八月に發病遊ばされ、書を諸方參學の徒に發しました、此書に依つて地方より集來せる者幾白人大師の枕頭を圍りて平癒を祈つたのでありますが、同月八日永光寺を明峰素哲禪師に譲られたる大師は、衆の爲に釋尊の行續に倣はれ、八大人覺を諄々と説示されました、座に列れる者は、その嚴肅なる光景と、その懇篤なる説示に頭を垂れ、涕淚滂沱、皆法衣の袖を濡らしました、越えて十四日淨髮沐浴して末後報恩の爲め、先師徹通義介禪師の眞前に供養の讀經を修し、翌十五日羅漢供養を營まれ

説法を試みられた、親ら死を豫覺し死を前知され乍ら、平然として爲すべきの行持を爲し、衆の爲に説法度生さるゝに至つては全く、其の機根の大にして、力量の絶倫なるに驚嘆さるゝのであります、其の夜半俄かに大衆を集め徐ろに衣を整へ、座に登り衆に示して曰く

「念起是病。不續是藥。一切善惡。都莫思量。纒涉恩慮。白雲萬里」

と。嗚呼末後轉法輪の一句は、實に生死を透脱し、正法を把住し、龍蛇の珠を懐き、一切の善惡邪正を離却せる祖師にして始めて吐却さるゝの句であります。而も大師集まれる門人弟子に懇ろに訓して曰く「予が化縁は既に盡きた、會ふ者は必ず離るゝことあり、憂惱を懐くこと莫れ、向後予を見んと欲する者は、勵み勵みて、我法を護持し、我命脈を永く斷絶せざる様努力し辨道せねばならぬ」と、釋尊は常在靈鷲山であります、達磨大師は常在嵩山少林寺であります、而して承陽大師は常在永平寺でありますと共に、我常濟大師は常在總持寺であり常在永光寺であり常在大乘寺であり、大師の足跡の留る所、大師の徳化の及ぶ所、其處に大師の活骨髓もあれば暖皮肉もあ

ります。即ち大師遺法の傳はる間、大師の命詠は生きて幾千幾萬歳億の人々の胸中に流れ込んで、暖き血となり肉となり居ることを知らねばならぬ。此の悲壯なる大師の提示を聞いて門人等は泣き乍ら遺偈を請ひますると、大師は筆を執られ

『自耕自種閑田地。幾度賣來買去新。無限靈苗繁茂處。法堂上見挿鐵人。』

と書し、筆を抛ち溘然として坐定にあるまゝ寂を示されたのであります。坐に在る峩山禪師、明峯禪師を始め大衆一同聲を放つて慟哭哀號し燭光爲めに暗く、洞谷山上の松籟又無常を説き、永光山裏の溪水又寂滅爲樂を囁いたのであります。

大師の遺骨は總持寺、大乘寺、永光寺、淨住寺の四寺に頒ち、各々塔を建て盛んなる供養を營み、此の舍利塔を今も猶ほ傳燈院と號び、法燈は永へに大師遺囑の如く輝いてゐるのであります。

大師入滅の後三十年、正平九年甲午三月二日、後村上天皇深く大師の徳風を追崇遊ばされ、佛慈禪師の徽號を賜はり、更に亦四百十八年を経たる安永元年壬辰十一月廿九日、後桃園天皇親しく宸翰を賜はり、大師の道望を追賞して、次の如き諡號があ

つたのであります。

勅 佛慈禪師人天宗師、佛祖嗣嫡奏對十事 叡問爲賜紫出世道場、感得一夢勝

因現放光動地祥瑞開法門於四處振德化於八紘身嘗雖沒竹塢白雲之室經悠遠

名今得達楓宸青鎖之闥來永慕苟思彼德如遇其人因

諡曰 弘徳圓明國師

實に是れ定永元年十一月二十九日、我が宗に於ける國師號賜諡の嚆矢でありまして又た大師の徳光と道譽が深く宮中の上に達してゐた事は此の御宸翰によるも明かな事實であります。而して明治四十二年九月二日、岩倉具定公の宮内大臣當時、畏くも明治天皇より常濟大師の諡號が御下賜になつたのであります。之れ獨り我宗の光榮のみならず佛教全體の光榮として、佛教界に在る者の肝に銘じ魂に銘すべき事柄であります。

第六節 大師の遺志と其の著述（下）

大師の遺志を繼承したる者は、峯山紹碩禪師、明峰素哲禪師であります。前者は總持寺の第二世とし、後者は永光寺の第二祖として有名であります。此外總持寺には五院開基があり二十五哲がある、五院は總ての直末寺院を代表して開祖の塔所を守り、兼ねて總持寺に對する評定權を有したのであります。五院開基を列記しますと

- | | | | |
|-----------|-----|-----------|-----|
| 開山大源宗真大和尚 | 普藏院 | 開山通幻寂靈大和尚 | 妙高庵 |
| 開山無端祖環大和尚 | 洞川庵 | 開山大徹宗令大和尚 | 傳法庵 |
| 開山實峰良秀大和尚 | 如意庵 | | |

となります。此外直末三十六門があり、庵末も多數あつて、此等の間に輪番制を置いた。即ち總持寺住職を一住とせず輪住制としたのであります。宗教は最も自由を尊び人格本位であります。換言すれば非常に民衆主義であつて、然も事に當つて毫末も私情を挿狭んではならぬのであります。我が常濟大師は其の開闢の寺院を遺法の弟子

に住職せしむることは勿論乍ら、更に進んで一切の輿論を公正ならしむる爲に特に輪住制を採用したのは頗るの卓見でありました。此の輪住制は最近明治の初頭迄繼續したのであります。明治の初年廢佛毀釋的氣風瀰漫し、謗法貶佛の徒輩出づるや、時勢上止むなく輪番制を廢して、獨住制を探り、獨住第一世として近世の高徳諸嶽奕堂禪師が就任されたのであります。

直末三十六門とは能登の永光寺、陸奥の正法寺、越中の自得寺、薩摩の皇徳寺、丹波の永澤寺、下總の總寧寺、近江の總寧寺、越中の龍泉寺、出羽の補陀寺、常陸の龍穩寺、陸奥の龍穩院、石見の龍雲寺、陸奥の永徳寺、下野の泉溪寺、陸奥の示現寺、伯耆の退休寺、出羽の正法寺、陸奥の常在院、美作の化生寺、出羽の永泉寺、美濃の妙應寺、越中の立川寺、出羽の向川寺、攝津の護國寺、備中の永祥寺、信濃の靈松寺、伯耆の總泉寺、伊勢の正法寺、伊勢の建福寺、陸奥の音聲寺、陸奥の長谷寺、豊後の泉福寺、肥前の玉林寺、肥前の醫王寺、出羽の安養寺。等てあります。斯くして大師示寂後幾許ならずして西は薩摩より北は陸奥に至る間、曹洞宗の門末法流は擴大され

て行きましました。曹洞土民と云はれ、曹洞は温健密實の家風あり、中庸平凡の宗派と云はれ乍ら、澎湃たる大流の如く、忽ちにして日本全國に教線を張り、上は九重の雲深きより下は農民商買の間にも、大師の遺志は傳はり大師の宗旨は宣傳され大師の言行が信仰さるゝに至つたのは、確かに大師は不世出の宗教的大材でありしことを立證して餘りあるのであります。吾等兒孫は承陽大師の行狀と常濟大師の行履とを照應して、其間兩祖一味修證不二の妙味在つて存するを看取し、此後彌々國民思想を啓發し世界人類の爲、慈悲を説き愛を布き道德を實踐し、健實なる宗教を布及するに、粉骨碎身の努力を拂ふべきであります、斯くして、高祖と太祖と吾等と一體となり一徳となり一佛祖となるのであります。

大師の著述的方面を觀察致しますに、其數は然だ多しとは云はれませぬ。即ち

- 傳光錄、二卷、總持清規、三卷、
- 坐禪用心記、一卷、信心銘拈提、一卷、
- 三根坐禪說、一卷、十種勸問奏對、一卷、

合計九卷であります。此の内傳光錄は承陽大師に於ける正法眼藏と對比すべく、佛祖の略歴と大悟徹底の模様を最も簡明に、而かも克明に拈提すること、釋尊に起筆して以下五十二代孤雲懷辨禪師に至つて居るのであります。各祖師の傳記體とも一面より云はれますが矢張大衆に垂示されたるものを侍者が編纂したのであつて、始めて請益されたるは正安二年正月十二日であります。此の傳光錄は文章が流麗であつて和漢兩様の文體を以て綴られてある。釋尊の法語は

一枝秀出老梅樹。荆棘與時築着來。

てあります、達磨大師の法語は

更無方所無邊表。豈有秋毫大者麼。

とあります。高祖承陽大師の拈評は

明皎々地無中表。豈有身心可脱落。

とあります。以上抄録せる三句に見るも太祖大師の宗乘上の見識の一般が窺れます、宗乘自在殺活縱横の禪機が溢れて居ります、次に總持清規は人間の道德的規範を

明かにせるものであつて又之を戒法の極致とも申されませう。坐禪用心記は高祖の坐禪義の普説解論とも見るべき學人に拖泥帶水して示されたる、叮嚀懇切なるもの、三根坐禪説は直截簡明に、禪の要機を叙述したる御文章であります。信心銘は鑑智僧璨大師の著述であつて之を大師が縦横に拈評されたものであります。十種の勅問は曩にも書ける如く後醍醐天皇よりの勅問に奉答せる明確なる名文でありまして、當時教界を震撼したるもので、教界に於ける禪の價值を論じて餘蘊なく、又た經文上に現はれたる疑問に明快に奏對せられてあるのであります。

第七節 十種の勅問

十種の勅問は元亨元年八月孤峰明覺和尚勅使として、天皇の御質疑を大師に齎らし、大師直ちに奏對したるもので、條理整然義理明白で、いたく叡慮に愜ひ給ふたものであります。餘り世に紹介されてゐませぬから、以下煩を厭はず全部を載せることにいたします。

勅問の一に曰く、祖意教意、是れ同か、是れ別か。

師曰く、祖と教とは水と波との如し、豈に異有らんや、然りと雖ども、教者は多く是れ教網に纏はれて、而して脱洒なる能はず、故に、古來祖意に參して旨を得るもの甚だ多し、太原の孚上座は初め座主たり、楊州の孝光に在て、涅槃經を講す、一禪者有り雪に阻られて、寺に在り、因て往て講を聽く、三因佛性三徳法身に至て、廣く法身の妙理を説す、禪者失笑す、座主講し罷みて、禪者を請して茶を喫せしめ、問て曰く、某甲業志狭劣、文に依て義を解す適々笑ひを蒙る、到らざる處有らん、伏して望らくは教へられよ、禪者曰く實に座主の法身を識ざるを笑ふ、座主曰く、是の如く解説す、何の處か不是なる、禪者曰く、請ふ座主更に説くこと一遍せよ。座主曰く、法身の理は、猶ほ大虚の如し、豈に三際を窮め、横に十方に亘り、八極に彌綸し、二儀を包括す、縁に隨ひ感に赴て周偏せざること難し、禪者曰く座主説き得て不是とは道はず、只だ法身量邊の事を説き得て、實に未だ法身を識らざること難し、禪者曰く座主説き得て不是とは道はず、只だに我が爲に説くべし、禪者曰く還て信ぜんや否や、座主曰く、焉ぞ敢て信ぜざらんや、禪者曰く、若し是の如くんば暫らく講を輟て、旬日室内に於て端座して、念を收め、心を攝し、善惡の諸縁一時に放却せよ、座主に教る所に依り、初夜從り五夜に至る、鼓角の聲を聞て、豁然とし契悟す云云、又西山亮座主、馬祖に謁す、祖問ふ、甚麼の經を講す、亮曰く、心經、祖曰く、甚麼を將て講す、亮云く、心を將て講す、祖曰く心は巧伎兒の如く意は和伎者の如し、六識は伴侶たり、争でか經を講し得ることか解せん、亮曰く、心既に講し得せんは是虚空講し得ること莫しや、祖曰く、却て是れ虚空講し得ん、亮拂袖して去る、祖召して曰く、亮、亮首を回らす、祖曰く、是れ甚麼ぞ、亮豁然として大悟す云云、此の外、永嘉大師、圭峯宗密、遂座主、長水子璿、本朝の傳教弘法二師等、祖師禪に參じて印證を得る者勝て計ふべからず、

勅問の二に曰く、達磨は是れ香至國王の第三子、而して四大五蘊具足の身なり、何に

依てか一莖の蘆に乗るや。

師曰く、諸佛諸祖不可思議の神通妙用有り、凡情の測るべき所に非ず、偏へに是れ佛法靈驗の致す所なり、達磨は是れ香至國王の子たりと雖も、實に是れ觀音大士の化身なり、豈に神通妙用無かるべけんや、然りと雖も祖師門下に於ては、神通妙用を以て、奇特と爲さず、龐居士曰く、神通并に妙用、水を運び及び柴を搬ぶご。

勅問の三に曰く、禪家に所謂、不立文字教外別傳と、然と雖も一大藏經皆是れ文字なり、禪家の語録も、亦是れ文字のみ、文字無んば、佛祖の言教何に依てか末世に流布せんや。

師曰く、文字は是れ魚兔の筌蹄也、若し魚兔を得れば即ち筌蹄渾て是れ用ふる所無し、修多羅の教は月を標すの指なり、若し月を觀れば、即ち指亦用所無し、然ども人皆筌蹄を認て魚兔を得ず、指頭を認て月を觀る故に不立文字と曰ふ、世尊四十九年鑿說、横説最後に至て、一枝の華を拈じて衆に示す、衆皆默然たり、唯迦葉尊者のみ破顔微笑す、是れ即ち不立文字教外別傳の極致なり。

勅問の四に曰く、有るが曰く、此の身は四大假合なり、命終の時、地大は地に歸し、水大は水に歸し、火大は火に歸し、風大は風に歸すと、然らば則ち何物有つてか地獄に墮するや。

師曰く、命終の時四大離散して一物無しと見るは、外道の空見にして、因果撥無底の見解なり、今生善惡の業因に依て來生に依身を感ず、或は天堂に生れ、或は地獄餓鬼畜生に入り、種々の苦を受くと、諸經の説分

明なり、若し是れ大解脱の人たるを得ば、地獄無し天堂無しと説くべし。

勅問の五に曰く、人皆先考先妣の爲めに靈供を備へ茶湯を献すと雖ども、少計も消ること無し知らず供を受るや否や。

師曰く、蜂の花を採るに、但其の味のみを取て色香を損せざるが如し、何の消すること之れ有らんや、又俱舍の世間品に曰く、中有は香を以て食と爲す、香を食するに由ての故に、健達縛と名く、若し少福の者は、唯惡香を食す、若し多福の者に、妙香を食すと爲す云云。

勅問の六に曰く、世尊雪嶺に於て六載修行、明星現する時、忽然として大悟し、曰く我と大地の有情非情と同時に成道すと、悟人は最も成道すべし、迷人何に依て成道するや。

師曰く、經に曰く始めて知る衆生本來成佛と云云、衆生本とより以來、佛性を具すと雖とも日に用ひて知らず、釋迦老子、成道の端的、活眼を開いて之を觀れば則ち草木國土悉皆成佛なり、六祖曰く、悟れば則ち衆生、是れ佛、迷へば則ち佛、是れ衆生、生佛元と隔て無く、迷が故に衆生と爲り、悟るが故に佛と爲る、衆生若し迷無んば、佛と何ぞ別たん、故に四十九年の説法迷の衆生を度して本有の佛性を見せしむるのみ。

勅問の七に曰く、金剛經に曰く、一切諸佛、及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆な此の經より出づと、金剛經は是れ釋迦佛の所説なり、然るに一切諸佛此經より出づと曰ふ、知らず此經を先と爲る耶、諸佛を先と爲るや。

師曰く、經の一字は常と訓し法と訓す、法は即ち理なり、此の法理は天地未分の先、諸佛出興以前より明歴々なり、此の法理に契ふを諸佛と爲し、此の法理に違ふを凡夫と爲す、仁者は之を得て之れを仁と謂ひ、智者は之を得て之れを智と謂ふ、阿耨菩提も亦た此の如し。

勅問の八に曰く、大通智勝佛は、十劫道道に坐して、佛法現前せず佛道を成するを得ずと云々、今時の人、一生坐禪修行なるも如何ぞ佛道を成せんや。

師曰く、大通智勝佛は、十劫坐道場の後に、佛法現前して而して佛道を成せること教中の所設分明なり、大通佛は大勇猛精進の力を以て十劫を経て食頃の如しと謂へり、今時の人も亦た大信根を具せば十劫を以て遠しと爲さず、然りと雖も、祖師門下に於ては別に生涯有り、臨濟和尚の曰く、大通とは是れ自己處々に於て其の萬法の無性無相に達するを名けて大通と爲す、智勝とは一切處に於て疑はず、一法を得ざるを名けて智勝と爲す、佛とは心清淨光明法界に透徹を得るを名けて佛と爲す、十劫坐道場とは十波羅密是れなり、佛法不現前とは佛本と不生、法本と不滅、云何ぞ更に現前すること有らん不得成佛道とは佛更に成佛すべからず云云、然れば則ち經文を以て上面に放在し、臨濟の語を以て下面に移し來て之れを見れば則ち何の解し難きこと有らんや。

勅問の九に曰く、經に曰く、清淨の行者は涅槃に入らず、破戒の比丘地獄に入らずと、清淨の行者は涅槃に入るべきに什麼と爲てか入らざる、破戒の比丘は地獄に入るべきに什麼と爲てか入らざる。

師曰く、涅槃と地獄とに於て二見を存するは小乗の見解なり、善惡不二、邪正一如の處に於て什麼の清淨と

破戒とを論せんや、圓覺了義經に曰く衆生國土同一法性、地獄天堂皆淨土なり、一切煩惱畢竟解脫云云、然らば則ち涅槃の求むべき無く、地獄の厭ふべきも無し、何ぞ清淨と破戒とを論ぜんや。

勅問の十に曰く、朕、趙州無の公案を以て提撕年尙し、未だ透徹せざるを以て恨と爲す、如何が工夫用心せんや。

師曰く、上來、勅問の中、此れは是れ最第一の義なり、故に地の爲めに足を畫き強て註脚を下さん、大慧禪師曰く、僧趙州に問ふ、狗子に還て佛性有や亦た無しや、州曰く、無、此の一字子、乃ち是れ許多の惡智惡覺を摧く底の器仗なり、有無の會を作すを得ざれ、道理の會を作すを得ざれ、意根下に向て思量卜度するを得ざれ、揚眉瞬目の處に向て深跟するを得ざれ、語路土に向て活計を作すを得ざれ、無事甲裡に颯在するを得ざれ、擧起の處に向て承當するを得ざれ、文字中に向て引證するを得ざれ、但だ十二時中四威儀の内に向て時々に提撕し、時々擧覺し、狗子に還て佛性有や、也た無しや、曰く、無と、日用を離れず、是の如く工夫を做て看よ、月の十日に便ち自ら見得せん云云、又曰く、狗子に還て佛性有りや、亦た無しや、州曰く、無道の一字子便ち是れ箇の生死の疑心を破る底の刀子なり、遣の刀子の櫛柄、只當人の手中に在り、別人をして手を下さしむを得ず、須らく是れ自家に手を下して始めて得べく、又曰く、擊石火閃電光の處に向て會するを得ず、直に心を用ゆる所無く之く所無きを得るの時、空に落るを怕ること莫れ、遣裏却て是れ好處なり、轟然として老鼠牛角に入り、便ち箇斷を見ん云云伏して願くは、皇帝陛下、萬機の餘暇十二時中學提撕し話頭上に疑破れば、則ち疑萬疑一時に破れん、那時本地の風光、本來の面目を徹證せんこと必せり、至祝至禱。

第八節 總持寺の將來

惟ふに太祖常濟大師は、曹洞宗の基礎を鞏固にし、其上に立派なる建築物を建て、今や十二萬の僧侶と一千萬の檀信徒と、之に伴ふ一萬三千箇寺の多數の寺院を擁する龍大なる大宗門となつたのであります。而して大師が自發自展の進取創造の氣象に富み給ひし如く、曹洞宗も不言のうちに進取主義をとりつゝ、今日に至つたのであります。然るに末世澆季の兆といふ可きか、我が國民思想の趨向を考覈して見まするに、動搖極りなく、其の信仰の立脚地の如きは一大震蕩を受け、此上地震でも参りますならば一溜りもなく倒潰するが如き杞憂がある、所謂惡魔が跋扈跳梁して、善神は影を潜め聲を呑んでゐるのであります。そこでどうしても信仰を以て國民思想の統一を量る、即ち宗教の力を以て思想の動亂を塞ぐ必要が生じます。然れば曹洞宗として先づ國論統一思想善導に力を竭さねばなりません。是れ第一の使命であります、第二の使命としては、海外發展であります。國際關係を見まするに、凡てが經濟の問題に依つて決

せられてゐる。世界に覇を稱する者は經濟的に卓越せる地歩を占め、如何なる無理も之を通さうとする。然して哲學も教育も經濟的哲學、經濟本位の教育が盛んになり、道徳も倫理も宗教も稍々もすれば經濟的に解決せられんとする傾向があります。之れは甚だ迷惑千萬である。能く外交上の用語に機會均等とか自由平等とか、或ひは正義人道との語が使用して居るのを見ますが、英國の態度を見ましても米國の態度を見ましても、經濟的軍國主義に陥りまして、弱國劣國を壓迫する手を一向緩めやうとはせぬ、しますると、含蓄の深い人道とか正義とか云ふ言語の意味は到底彼等には徹底せぬ、否理解が可能なのであります。而して有色人種であるからとて之を排斥し、黒人種であるからとて之を虐待して恬として耻ないのではありません。その愛たるや頗る御都合主義の愛となり、此の偏頗な愛を眞正なる愛に引戻しますには、釋迦牟尼佛の慈悲、一切衆生皆是吾子の思想を海外にも宣傳して愆れる彼等の信仰を立て換へねばなりません。特に曹洞宗は佛法の總府として、直指人心見性成佛を説き、不立文字教外別傳を説き、盡大地沙門の一隻眼を説いて、絶對的の眞理王國を建設しま

する爲に、一舉手一投足と雖も之れ等閑にせず、喫茶喫飯の事をも假初に付せず、觸處々々に眞正の道、神聖な道を實踐躬行して行く宗旨でありますから、斯くの如き宗教を世界に宣傳しなすことは乃ち人類無上の福音と信じます。

扱て如上の二問題、第一曹洞宗の國民思想統一策、第二國外宣傳であります。此の二問題の實は根本問題とも云ふべき靈的方面の問題即ち信仰上の價值を此際一言して、此の信仰によつて將來總持寺は如何に發展すべきであるか、而して常濟大師の慈恩に法孫として如何に報答すべきであるかを、暗示して置かうと思ひます。從來曹洞宗の信仰と申しますと、信者間には何分茫漠たる憾がありました。併し乍ら曹洞宗の信仰程短刀直入的でしかも眞に迫つてゐるものはありません。即ち禪的信仰とは坐禪であります、坐禪は行住坐臥の間に修すべき人間としての道であります。運作顛倒の上にも、把住放行の上にも坐禪を實現するならば、夫で禪の信仰は活きて光輝を放ちます。商業三昧、農業三昧、實業三昧、工業三昧、政治三昧は悉く其業の上に禪の信仰を活動させるの謂であります、三昧とは純粹なる靈の境致に入り切ることであり

ます。如何禪の信仰を御諒解願つた上で太祖大師の御行狀を御覽下さいますと、大師は寔に能く忠實に自己の生を充實された方であります。

大師は六百五十餘年の昔、能登の山奥に法輪を轉ぜられても其の徳化は全く日本の擴がりました。況んや大正の現代は時代に於て既に日本といふ單なる小舞臺ではなく、世界といふ大なる活舞臺に立つてゐるのであります。太祖大師だけの信仰を以て進みましたならば必ずや、近き將來に於て、曹洞宗を世界的の宗教と致し得る者と思ひます。殊に總持寺は今や日本の中樞地たる鶴見に移轉されて發展隆興の瑞兆が明かてあります。冀くは此の活舞臺によつて、太祖大師の偉靈を彌々輝かし、其の宗教的地歩を益々擴大して参りますならば、將來の總持寺は世界人類の殿堂であり、世界人類の魂と成ることであります。

兩祖を懐ふ畢

大正十一年三月廿日印刷
大正十一年三月廿三日發行

兩祖を懐ふ

定價金八拾錢

著者

佐々木 珍 龍

發行者

東京市深川區御船藏前町三四番地
久内 大 賢

印刷者

東京市淺草區船場町二八番地
小久保 金 作

印刷所

東京オフセツト印刷株式會社

東京市深川區御船藏前町三十四番地

發行所

一 喝 社

電話本所二一〇九番
振替東京三三五番

發 賣 書 目

<p>新井石禪 禪師著 修證義講話 (第五版) <small>ポケット形</small> 三三〇頁 定價 金八拾錢 送料 金六拾錢</p>	<p>長谷部隆 諦氏著 印度宗教實見記 <small>菊版</small> 二八八頁 定價 金壹圓七拾錢 送料 金十一錢</p>	<p>岡田宜法 先生著 承陽大師御傳記講話 <small>三六</small> 三七〇頁 定價 金壹圓五拾錢 送料 金十一錢</p>	<p>宗政研究 會編纂 法規大全 (第四版) <small>四五</small> 四五六頁 定價 金壹圓五拾錢 送料 金十一錢</p>	<p>淺野斧山 老師著 禪病論 <small>三二</small> 三二〇頁 定價 金八拾錢 送料 金八錢</p>	<p>日置默仙 禪師著 活禪活話 <small>四三</small> 四三〇頁 定價 金壹圓五拾錢 送料 金十一錢</p>
--	---	---	--	--	--

發行所 東京市深川區御船藏前町三四番地 一喝社
電話本所 〇九一〇番 振替東京 三三三番 五番

574
24

終

終